

ISSN 2434-9658

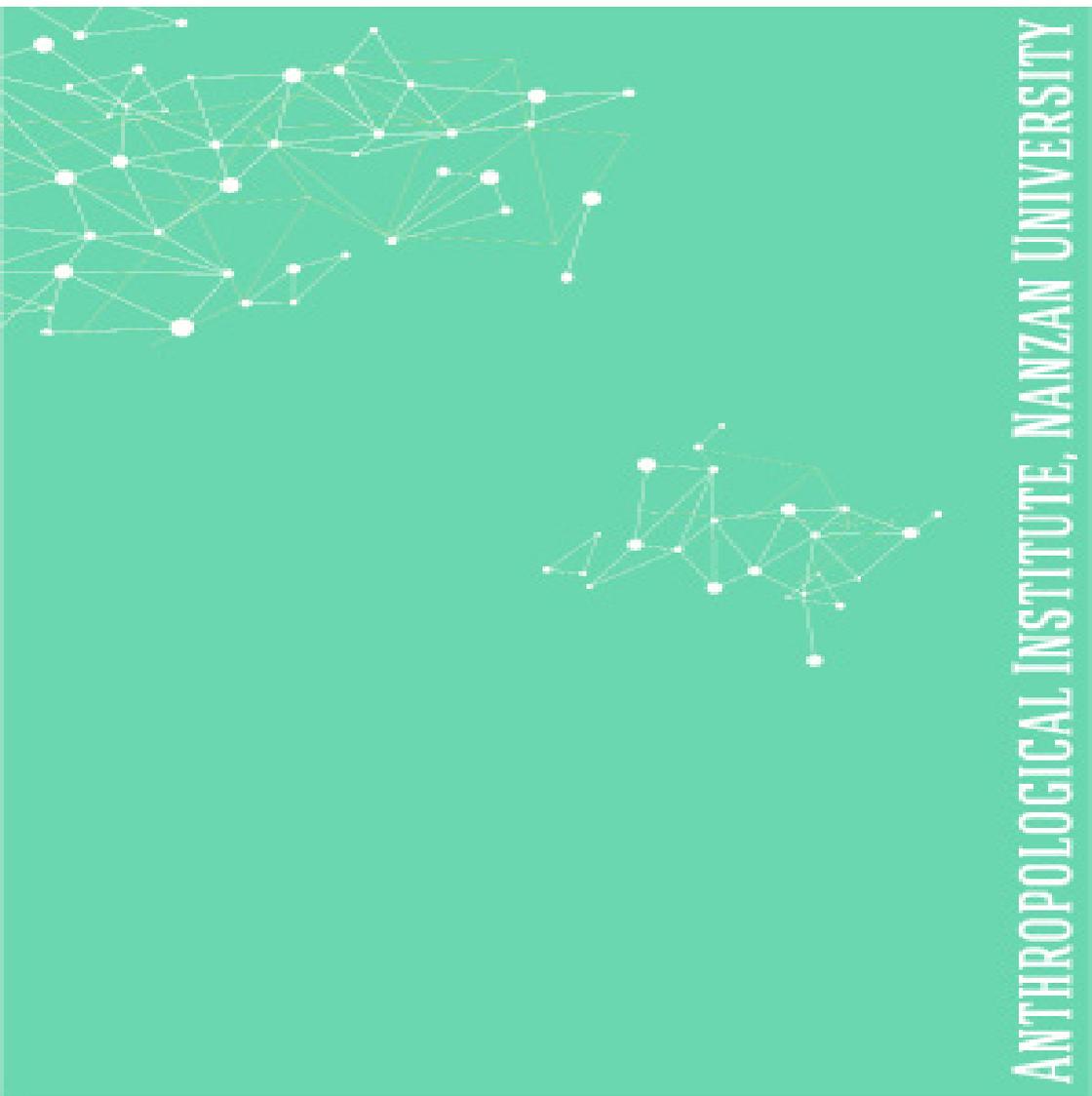
2020
vol.

07

じんるいげん
Booklet

南山大学人類学研究所設立70周年 記念シンポジウム講演録

人類研の歩みと 人類学の未来



ANTHROPOLOGICAL INSTITUTE, NANZAN UNIVERSITY

じんるいけんBooklet vol.7

南山大学人類学研究所
設立70周年 記念シンポジウム講演録

人類研の歩みと 人類学の未来

はじめに

宮脇 千絵(南山大学人類学研究所・准教授／第一種研究所員)

本ブックレットは、2019年12月7日に開催された南山大学人類学研究所設立70周年記念シンポジウム「人類研の歩みと人類学の未来」の講演録である。

2018年初夏、他のシンポジウム案や予算組みを考えている際に、ふいに翌年に人類学研究所(人類研)が70周年を迎えることが明らかとなった。そこから急展開でもって、7月には大学に個別事業費の申請をおこなうため、70周年を記念する年の計画に入った。同年12月に、所長の渡部森哉先生、元所長の後藤明先生、第一種研究所員(当時)の藤川美代子先生、宮脇千絵で打ち合わせをおこない、本シンポジウムの骨子を固めた。

人類研の70年の歴史は一筋縄では紐解けない。誤解を恐れずにいえば、それは必ずしも一本の筋の通った歴史ではなく、幾度かの改組を繰り返してきているからだ。振り返ると、創立から最初の改組までを第一期(1949～1979年)、それから次の改組までを第二期(1979～2008年)、そしてそれ以降を第三期(2010年～現在)とみることができる。その間、多くの人がかかわってこられたが、人類研の特徴はなんとといっても、研究者だけではなくカトリック神言会の神父様との関わりである。

そこで本シンポジウムでは、人類研と神言会との関わりに焦点を当てることとした。このような経緯から、研究所の根源となったW・シュミット神父の功績、神父様でありながら研究所の所長を務められたクネヒト・ペトロ先生のご経験、そして現在と未来へとつながる報告、という構成となった。下記が当日のプログラムである。

人類学研究所設立70周年記念事業関連

人類学研究所設立70周年記念シンポジウム「人類研の歩みと人類学の未来」

日時:2019年12月7日(土)

シンポジウム:13:30～17:30(開場13:00)

懇親会:18:00～20:00

会場:シンポジウム:南山大学S棟・S21教室

懇親会:南山大学S棟3階 BISTRO CEZARS

主催：南山大学人類学研究所

共催：中部人類学談話会

- 13:30 学長挨拶 鳥巢義文(南山大学・学長)
- 13:35 趣旨説明 渡部森哉(南山大学・教授／人類学研究所・所長)
- 13:40 「ドイツ語圏人類学におけるP・W・シュミット」
山田仁史(東北大学・准教授)
- 14:25 "Missionary and Anthropologist, a Contradiction?"
クネヒト・ペトロ(南山大学・元教授／人類学研究所・元所長)
- 15:10 休憩
- 15:30 「人類研の目指したものと、そして目指すべきもの」
後藤明(南山大学・教授／人類学研究所・第二種研究所員)
- 16:00 コメント 伊藤亜人(東京大学・名誉教授)
- 16:20 休憩
- 16:30 総合討論
- 17:30 閉会の挨拶 吉田竹也(南山大学・副学長／人類学研究所・第二種研究所員)
- 18:00 懇親会(会場：S棟3階 BISTRO CEZARS)
(司会：宮脇千絵(南山大学・准教授／人類学研究所・第一種研究所員))

当日は、南山大学で人類学を学んだ卒業生やクネヒト先生のかつての教え子などを含む約90名の方にお越しいただいた。ご登壇いただいた先生方、お越しいただいたみなさまに感謝申し上げます。

また約1年半の準備期間には多くの方々のご協力を賜った。永井英治先生(国際教養学部)には人類研のアーカイブスに関する貴重なご助言をいただいた。ドーマン・ベンジャミン先生(人類研・第一種研究所員)は、クネヒト先生と後藤明先生の対談を映像で残すことを計画され、2回にわたる撮影を経て、映像の公開をおこなった。その過程で、クネヒト先生との対話を深めることができた。菅沼文乃さん(人類研非常勤研究員)には、毎回の打ち合わせにも同席いただき、ポスターや要旨集の作成をはじめ細々とした資料の整理を担っていただいた。人類研共同研究員(兼非常勤研究員)の角南聡一郎先生(神奈川大学)や中尾世治先生(総合地球環境学研究所)にも、多くのご助言を賜った。中部人類学談話会(文化人類学会中部地区研究懇談会)には、共催として幅広い周知にご協力いただいた。映像撮影と編集でお世話に

なった岡根智美さんとマシュー・トーマス・ロットさん、懇親会を引き受けてくださったBISTRO CEZARSの方々、折に触れてさまざまなアドバイスをくれた社会倫理研究所の方々、いつも支えてくれている人類研の事務スタッフの方々、当日アルバイトの学生のみなさん。改めて感謝申し上げます。

70周年という大きな節目を無事に終えたところで、世界は新型コロナ・ウイルスという思いもよらぬ事態に取り巻かれてしまった。研究所の今後の活動への影響も少なくなく、新たな段階を模索しているところである。

人類学研究所の歩み

1935年	神言会教師の日本文化理解を深める目的で、人類学研究所の設立案が構想される。
同年	ドイツのアントロポス研究所の創立者・所長であるW・シュミットが日本に立ち寄り、神言会会員と討議した結果、アントロポス研究所日本支部設立案を神言会総会に提出する。しかしその後、計画はいったん棚上げされる。
1948年	南山大学設置申請書が文部省に提出された際、人類学研究所の設置が盛り込まれる。
1949年9月1日	大学創立より半年遅れて「人類学民族学研究所」として開所式をおこなう。所長は沼澤喜市、副所長は中山英司。
1953年夏	人類学民族学研究所を教師館であった五軒家町の旧ピオ十一世館に移転する。
1954年	第二代所長にA・レンメルヒルトが就任。
同年	名称を「人類学研究所」に統一する。
1963年	北京で1942年に創刊された『Folklore Studies』を、『Asian Folklore Studies』とし、人類学研究所で刊行(～2007年)。
1964年	南山大学が山里新校舎に移転したのに伴い、研究所も第1研究棟6階に移転する。附属の陳列室は新図書館地下1階に収まる。
1970年	沼澤喜市学長が研究所所長事務取扱を兼務。
1972年	沼澤喜市が学長退任後、所長に就任(～1973年3月31日)。
同年	『人類学研究所紀要』1号発行(～1979年8号)。
1973年	所長にA・レンメルヒルトが就任(～1975年3月31日)。
1975年	所長事務取扱に小林知生が就任(～1978年3月31日)。
1978年	所長事務取扱に山田隆治が就任(～1979年3月31日)。
1979年	改組により専任研究所員(第一種研究所員)が配置される。所長事務取扱および第二種研究所員(兼)に山田隆治が就任。

同年	附属の陳列室が南山大学人類学博物館と名称変更し、博物館相当施設となる。
1987年	所長事務取扱に倉田勇が就任(～1991年3月31日)。
1991年	所長事務取扱に山田隆治が就任(～1995年3月31日)。
1992年	『人類学研究所通信』第1号刊行(～2010年第17・18号)。
1995年	J・W・ハイジックが南山宗教文化研究所所長、人類学研究所所長を兼務。
1996年	所長にクネヒト・ペトロ(第一種研究所員)が就任(～2003年3月31日)。
2003年	所長に森部一(第二種研究所員)が就任(～2005年3月31日)。
2005年	所長に坂井信三(第二種研究所員)が就任(～2007年3月31日)。
2007年4月1日	所長不在。
同年5月8日	所長に渡邊学(南山宗教文化研究所第一種研究所員)が就任。
2008年	『Asian Folklore Studies』を『Asian Ethnology』と改名して刊行(～現在)。
2010年	所長に後藤明(第二種研究所員)が就任(～2018年3月31日)。
2011年3月	『年報人類学研究』第1号刊行(～現在第9号)。
2013年3月	『人類学研究所研究論集』第1号刊行(～現在第8号)
2018年2月	『じゅんるいけんBooklet』第1号刊行(～現在第5号)。
2018年4月	所長に渡部森哉(第二種研究所員)が就任(～現在)。

(渡邊学(編)2010「人類学研究所小史」『人類学研究所通信』第17・18号、pp.3-7を参考に作成)

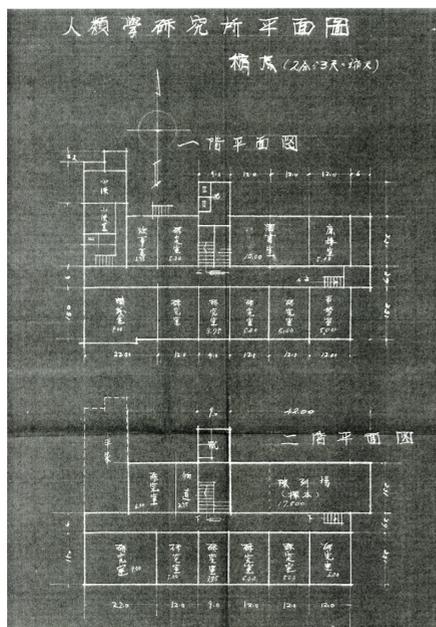
70周年アーカイブ資料



五軒家町に構想された人類学民族学研究所(出典:『南山学園史料集』12、p.32)



旧「ピオ十一世館」、後に「人類学研究所」となる



当初の平面図(出典:『南山学園史料集』6、p.9)



人類学・民族学研究所開所式(1949年9月1日)



人類学・民族学研究所の看板とともに



前列左から2番目が中山英司氏、3番目が初代南山大学長のアロイス・パッヘ氏、5番目が沼澤喜市氏。背景は当時の中学高校の校舎正面。中段には当時の英文、仏文の教員が列席している



大学第2代学長・人類研初代所長である沼澤喜市氏



東ニューギニアで調査をおこなう沼澤喜市氏(1964年9月)



早川正一氏



小林知生氏



浅井恵倫氏



人類学研究陳列室に三笠宮ご夫妻を迎えて(1964年11月21日)



人類学研究陳列室(1971年、撮影者:早川正一氏)



人類学研究陳列室(1980年8月28日)



人類学研究陳列室(撮影年不明)

(写真はすべて南山アーカイブス所蔵)

目次

はじめに	宮脇 千絵	i
人類学研究所の歩み		v
70周年アーカイブ資料		vii
<hr/>		
学長挨拶	鳥巢 義文	01
趣旨説明	渡部 森哉	03
<hr/>		
講演1 ドイツ語圏人類学におけるP・W・シュミット		
	山田 仁史	07
講演2 Missionary and Anthropologist, a Contradiction?		
	クネヒト・ペトロ	21
講演3 人類研の目指したもの、そして目指すべきもの		
	後藤 明	31
<hr/>		
コメント	伊藤 亜人	47
総合討論		55
<hr/>		
閉会の挨拶	吉田 竹也	69

学長挨拶



鳥巢 義文
(南山大学・学長)

皆さん、こんにちは。今日は寒い中、外を歩いて来られて本当に大変だったと思います。私もパッヘスクエアを横切るだけで、ウーツとなってしまいました。

南山大学人類学研究所設立70周年記念シンポジウムということでお越しくださり、本当にありがとうございます。一口に70年と申しまして、一つの事業をこれだけ長い年月にわたって継承し、また発展させようとこれまで関わってこられた研究所関係者の方々には、いつも幸いな成功事例ばかりではなく、さまざまな難問題あるいは壁に直面された経験もおありなのだろうと思います。

本研究所の歴史を私自身の人生に絡めて、ごく簡単にたどってみます。1946年設立の南山外国語専門学校を前身とする本大学が、3年後の1949年に、パッヘ学長の下、文学部1学部で新たにスタートを切った際に、本研究所は「人類学・民族学研究所」という名称で開所されています。このとき、もちろん私はまだ生まれていません。

その後、私が生まれた1954年には、昭和区五軒家町の旧ピオ館の中にあった研究所が「人類学研究所」という名称になっています。また、私が南山大学へ入学した1973年になると、当時のヒルシュマイヤー学長の下で研究所の改組が検討されるようになったと言われています。この折に、人類学博物館が人類学研究所から独立しています。

神言会会員でありドイツのアントロポス研究所の創立者でもあるウィルヘルム・シュミットとの交流の中で生まれた人類学研究所は、70周年を迎えました。果たしてその足跡はどのようなものであったか、また、これからどこへ向かおうとしているのか、この後、お話しくださる3名の発表者の登壇を興味津々の思いで待っているのは私だけではないと思います。

それでは、私のご挨拶はここまでとさせていただいて、マイクを渡部研究所長にお渡ししたいと思います。ご清聴ありがとうございました。

趣旨説明



渡部 森哉

(南山大学・教授／人類学研究所・所長)

今日はお越しいただきありがとうございます。人類学研究所の設立70周年という節目に、これまでの人類学研究所の歩みを振り返り、この人類学研究所をどのように継承して未来へつなげていくのかということを議論するために、シンポジウムを構想いたしました。

とは言うものの、研究所の歩みを振り返るということはすごく難しいことが分かりました。初代所長の沼澤喜市先生も書かれているのですが、沼澤先生も所長になったときに、どんな経緯で、どんな構想で人類学研究所ができたのか全く分からなかったということです。そして、後でお話が出てきますが、シュミットの下でこの研究所が設立されたと理解されているのですが、シュミット自身がこの研究所の構想にすごく不満があったということも書かれています。

研究所のことを調べようと思っても、これは大学の組織であると同時に神言会と非常に深い関わりがあり、ここで活躍した人類学者の多くが神言会員であるため、神言会に問い合わせないと分からないことがたくさんあります。ということで、人類学研究所と神言会の関係、そして、人類学研究所の歴史自体が非常に大きなテーマとなっております。

今日のシンポジウムは、1回で完結するものではありません。今年から『『大きな理論』と『現場の理論』』というテーマの共同研究会を始めました。それは例えば、今回扱うシュミットが構想した大きな理論が、日本というフィールド、現場でどのように受容され、そしてローカル化されたかということなどを事例に考えることです。これから、それぞれの研究者がそれぞれのフィールドの事例に従って、理論がそれぞれのフィールドでどのように受容されたかということを議論していく予定です。

今日の話題の一つであるシュミットは、そもそも神言会の神父でした。人類学者としての立場と神言会の立場としてシュミットを理解しなければいけません。今回は、神言会士であり、そして人類学者である、人類学研究所の元所長でありますクネヒト先生に、そのことについてお話しさせていただきたいと思います。クネヒト先生には、これまで人類研のほうで2回ほどインタビューをさせていただき、それをビデオ撮影し、今後ウェブでアップする予定ですので、そちらも併せてご覧いただきたいと思います。

そして、シュミットについて語るにはドイツ語圏の人類学に精通していなければいけないのですが、今回、シュミットを語るのに最適な研究者であります、東北大学の山田先生にご登壇いただきます。その後、人類学研究所のこれまでの歩み、とくにここ10年の歩みを後藤明先生に語っていただきます。後藤先生はこの10年、どのようなビジョンで人類学研究所を運営してきたのか。そして、どのように未来に繋げていくのかを語っていただきます。

今の3名の方にご登壇いただく計画は、実はもう今から1年以上前に決まっておりました。そして、今日、最後にコメントをいただく伊藤亜人先生はクネヒト先生の昔からのご友人であ

り、クネヒト先生の研究の方向性を決めたというか、影響を与えた人類学者の一人だと伺っております。ですから、伊藤先生は人類研の歩みに間接的に関わっているということで、今日のシンポジウムのコメンテーターとして非常にふさわしい方だと思います。

今日の登壇者、コメンテーター、そして、お越しいただいた参加者の皆さんにお礼を申し上げます。挨拶とさせていただきます。



講演 1

ドイツ語圏人類学における
P・W・シュミット



山田 仁史
(東北大学・准教授)

皆さん、こんにちは。今日は大役というか、私にはちょっと荷の重いお話をいただきまして、どこまでお話しできるか分からないのですが、この人類学研究所のももとの発端となったドイツの研究者であるシュミットを手掛かりにして、今後の、未来に関わることまではお話しできないかもしれませんが、少しでも皆さまのご参考になればと思って、参りました。

今日、この会場にはいろいろな立場や背景をおもちの方がいらっしゃると思うので、本当に基本的なことからになります。タイトルにしました「ドイツ語圏人類学におけるP・W・シュミット」という、そのドイツ語圏ということからお話ししていきたいと思えます。

ドイツ語圏といいますが、この地図はドイツ語の方言の分布図なのですが、国境と一致しているわけではありません(図1)。言語と国境の境界というのが一致してはいません。ドイツ本国、それからオーストリアが主なドイツ語の話されている地域ですが、その他にスイスの一部分、イタリアの北部、フランスやベルギー、そして、オランダ語に至っては、この地図ではドイツ



図1 ドイツ方言分布図(相良守峯編『独和大辞典』博友社、一九七七年二四版)

語の方言ということにされていて、オランダの方はお怒りではないかと思うのですが、このように分類してみることもできるわけです。ドイツ語圏の学問と言ったときには、一応、ドイツとオーストリアとスイスのドイツ語圏ぐらいのくくりで把握していただければいいのではないかと思います。

次に、「人類学」という名称です。英語圏では「社会・文化人類学 (social and cultural anthropology; sociocultural anthropology)」という言葉が一般に使われていますが、ドイツ語では長らく「民族学 (Völkerkunde, Ethnologie)」という呼び方がされてきました。

ところが、その動きが最近ちょっと変わってきています。ドイツの代表的な研究者の団体であるドイツ民族学会 (Deutsche Gesellschaft für Völkerkunde: DGV) というものが、近年に改称しました。私は、参加したわけではないですが、2017年にベルリンで開かれた大会の報告を読むと、そこで改称されたということが書かれていました。改称時点での会員数は731名だったのですが、その過半数以上の得票を得て名称が変わりました。

その背景にどんなことがあったのかということを考えてみますと、3つぐらいの背景を考えていいのではないかと思います。

直接には、1番目として、国際学界へ接続したいという強い思いがあったように思います。英語が国際的な学術言語になっている今日では、そこにうまく接点を設けることが必要だと考えられてきたわけです。とくに第二次世界大戦の後で、ドイツ語圏の、これは民族学、人類学に限らないと思いますが、世界の学術界におけるプレゼンスが低下したことは否めないわけです。そういう中で、取り残されているという意識が高まったことが一つあると思います。

2番目として、「民族学」と名乗ることで、「民族」という一つの人類の集団に焦点を当てることが前提となるわけですが、そうではなくて、「人類」の個々の人々の苦しみや困難と直接向き合う姿勢を前面に出したということがあると思います。この背景には、当然、ヨーロッパで昨今問題が大きくなっている移民や難民のことも関わってくるわけです。必ずしもエスニックグループというくくりで捉え切れない問題が増加しているということです。

3番目として、「過去との訣別」と書きましたが、1990年に東西ドイツが再統合しました。1999年の元日からはユーロ圏、単一通貨のユーロが欧州で導入されました。このほぼ10年間にドイツ語圏では、過去の民族学の洗い直しといえますか、過去の清算といえますか、振り返りが盛んになされたわけです。とりわけナチスドイツ時代にドイツ語圏の人類学の研究者がどういった関わりをもっていたのかということの見直しが大きく進みました。

それをよく調べてみますと、当時の、1933年から1945年までの人々の動きというのは本当に多様で、ひどいケースですと強制収容所に送られて死亡した民族学者もいました。中には、

ナチスドイツに協力したにもかかわらず、戦後すぐに教授職に戻されて、そのまま在職していた人もいたことが明らかになりました。

こういった過去をあらためて振り返って、いったんそれをなかったものにして、目をつぶるのではなくて、それを踏まえた上で未来に進みたいという動きが1960年代の学生運動のころから盛り上がっていったのですが、東西ドイツの統一を経て、ようやく実現したということが言えると思います。いずれにしましても、今のドイツ語圏の人類学者たちが新しい方向を模索して、何とか国際学界の中でもやっけていこうという意識を強くもっているということでは言えるのではないかと思います。

ただ、「人類学」という用語、あるいは概念がこれまで存在しなかったわけではありません。振り返ってみますと、「民族学(Ethnologie)」や「民族誌(Ethnographie)」といった概念のほうが、18世紀の末から、主にゲッティンゲンを中心とする研究者たちの間で、少しずつ、普及し浸透していました。これが国際的にも広がりを見せまして、英語圏、それからフランス語圏でも、19世紀の半ばぐらいまで、「ethnology」「ethnography」ということが盛んに言われまして、一部の流れは現在まで残っているわけですが、19世紀の半ば過ぎぐらいに、「人類学(Anthropologie)」ということがドイツ語圏でもやや盛り上がりを見せたような気がします。

その一つは、アードルフ・バステアーンの『歴史の中の人類』という3巻の本です。それから、テオドール・ヴァイツがまとめた『自然民族の人類学』という6巻本です。ですから、このころには「人類学」という言葉を……広く人類全体を研究する学問という自負をもってやろうという意識があったのではないかと思います。

この2つのシリーズは、人類学では必ず最初に学ぶことになるエドワード・タイラーの『原始文化(Primitive Culture)』の序文の中で、「私はとくにProfessorバステアーンとProfessorヴァイツの2冊に恩恵を受けている」というように、とくによく利用したということで名前を挙げて謝辞が述べられているほどです。ですから、こういう過去を振り返ってみますと、方向性としては「人類」全体への関心が復活しているという見方もまたできるのかもしれませんが。

こうしたドイツの人類学の大きな流れの中でシュミットをどのように位置付けたいのだろうかということ、非常に参考になるものがあります。2005年に出ました『One Discipline, Four Ways』という、フランス、イギリス、ドイツ、アメリカの各国での人類学が実はかなり異なる歩みをしてきたということ、それぞれの国の、それぞれの言語圏の人類学史に詳しい研究者がドイツのハレでレクチャーしたものをまとめたものです。

この中でドイツ語圏について書いているのは、今はもう退官されたのですが、ウィーン大学の人類学の教授をしていたアンドレ・ギングリッチさんです。ギングリッチさんのまとめの

中に、戦前までのドイツ語圏における人類学の主要な学派を図にしたものがあります。詳しくご覧になりたい方は、この本を後で確認していただければいいと思います。

これを見ますと、戦前にとくに大きなドイツ語圏の学派として2つあったと挙げられています。

一つが文化圏学派で、ウィーンを中心として存在していました。そして、文化圏学派のリーダーになっていたのがヴィルヘルム・シュミットです。もう一つは、フランクフルトにあった文化形態学派で、こちらはフロベニウスがリーダー役をやっていて、その弟子でアシスタントをしていたのがアードルフ・イェンゼンという構成です。

その他に、ちょっと見落とされがちなのですが、機能主義的な研究者の一群がいます。彼らはどこに拠点を置いていたというわけではありませんが、同じような志向性をもっていました。リヒャルト・トゥルンヴァルトのような、実際に綿密なフィールドワークをして、かなりマリノフスキーのような機能主義的な考え方を強くもっていた人もいました。彼らは民族社会学(Ethnosoziologie)と呼ばれることもあります。

これは基本的に優れた見通しだと思うのですが、よく見ますと、ウィーンのカ文化圏学派の人たちは「神学的な文化史学派」とも書かれています。「神学的(theological)」ということの意味は、先ほどの渡部先生のお話にもありましたが、主にウィーンに集った神言会の神父たちが主導していたからです。シュミットが代表者ですが、その他に、この後、詳しく話していきますが、コッパース、シェベスタ、グジンデといった人々がこの学派を担っていました。

ただ、この2つの学派は、残念ですが、ナチスドイツの下で大幅に力を削ぎ落とされてしまいました。文化形態学派のフロベニウスは、さほどナチスに協力的でもなく、非協力的でもなく、そのまま仕事を続けていたのですが、弟子のイェンゼンは奥さんがクォーターのユダヤ人で、離婚を拒んだために教職を追われるということがありました。戦後、復歸します。それから、文化圏学派のシュミットたちはナチスに批判的だったこともあり、ウィーンにいられなくなってスイスに亡命するということがありまして、苦難の歴史を歩みました。冒頭に言いましたが、ドイツ語圏の人類学が戦後になって力を弱めた一つの原因は、この辺にもあるのではないかと思います。

人間としてのシュミットということに入っていきたいと思います。

パーター・ヴィルヘルム・シュミット、「P」と書いているのは「パーター」の略で「神父」という敬称ですので、彼の本名はヴィルヘルム・シュミットです。彼については、岸上伸啓先生が編集されました『はじめて学ぶ文化人類学』という本の中に私もシュミットの項目を書かせていただいたので、そこに書いたことに基づきながら話していきたいと思います。

彼の生まれは1868年2月16日です。ドイツ西北部のヴェストファーレン州ドルトムントの近くにあるヘルデというところで生まれています。労働者の家庭で、決して豊かな家庭ではありませんでした。生活は楽ではなかったと思います。2歳のときにお父さんを亡くしています。お母さんが再婚して、合わせて4人兄弟の一番上という生い立ちでした。

おそらく勉学を続けるのが難しかったためだと思われるが、15歳のときにオランダのステイルにある神言会(Societas Verbi Divini: SVD)に入ります。そして、その後のシュミットのキャリアを考えますと、本当にびっくりしてしまうのですが、彼は正規の大学教育というのは、ほとんど受けていません。3セメスターにわたってベルリン大学で学んでいるだけです。しかも、オリエント諸言語といったようなことで、彼の後の専門になる民族学、人類学は、正規の教育はほぼ、全くと言っていいほど受けていなくて、独学だということがあります。

その後、彼はオーストリアのウィーンに居を移しまして、ウィーン近郊にあるメートリングにある聖ガブリエル宣教院で教鞭を執ります。ここの学校で教えて、研究にも従事します。あまり知られていないことかもしれませんが、彼は音楽的な才能もあった方で、聖歌隊のための作曲や、また、指揮者、オルガンの演奏、それから、一般向けの説教もしており、かなり多忙な生活だったのではないかと思います。

彼の研究のキャリアのスタートは、まず言語学です。最初は民族学ではなくて、東南アジアやオセアニアの言語、それからオーストラリアの言語の分類というような、非常に難しい仕事だと思うのですが、これをまずやります。そこからだんだんと民族学にシフトしていったという経緯があります。

1906年に、これはよく知られている『アントロポス』という、今も出ている黄色い表紙の雑誌ですが、民族学や言語学の国際的な専門誌を創刊しまして、その初代編集長になります。

第一次大戦のときは、オーストリア＝ハンガリー二重帝国最後の皇帝であったカール1世の相談役をしたり、聴罪師をしたり、それから、1920年代にはローマ教皇ピウス11世の庇護を得まして、バチカンのラテラノ博物館を創設して、初代館長にもなっています。そういう、ある種の政治的な力量もあった人だと思います。

それから、先ほども言いましたが、ナチスに批判的だったために、1938年にオーストリアがナチスによって併合されますと、ウィーンを脱出せざるを得なくなってスイスに移り、フリブール市近郊にあるフロドヴィルという、直訳すると「冷たい町」ですが、その後はここで過ごすわけです。フリブール大学で正教授として民族学を講ずるという生活に入ります。

学問的なことにあまり触れずに、人間としてのシュミットについて触れてきましたが、学問的な評価は後に置いておきます。

彼の晩年は非常に寂しいものだったように想像されます。自説、彼の立てた巨大な文化圏という学説は、晩年になるともう支持者がほぼいない状態になっていましたし、同僚たちの中でも孤立して、孤独を感じていたのではないかと思われます。彼のお墓はウィーン郊外にあるメートリングの聖ガブリエル宣教院の墓地にあります。

彼の協力者であったコッパース、グジンデ、シェベスタといった神言会の神父たちのお墓も、これと同じ一角にありまして、幸い私も数年前に行くことができたのですが、著書を通じて見知っている名前がこの墓地の中に点々とありました。そのようなところに眠っています。

少し南山大学との関係にも言及したいと思います。先に述べましたが、1938年以降、ウィーンにいたことができなくなったシュミットはスイスに行きフリブールで教えるわけですが、そこを訪れたのが、人類学研究所の初代所長でいらっしやっただ沼澤喜市先生です。9年間にわたってシュミットと生活、研究を共にされています。

もともとお生まれは山形県でいらっしやっして、上智大学を出られた後、ヨーロッパに渡り、シュミットの下で博士号を取っています。博士論文のテーマは「日本神話における天地の分離」ということでした。1949年に帰国されて、創立直後の南山大学にいらっしやっただわけです。人類学・民族学研究所から人類学研究所へと、重責を担ってこられました。

他にも、南山大学でかつて出していた「選書」というシリーズがありまして、この第2巻目がシュミットの『母権』という著作の日本語訳です。山田隆治先生が訳されています。シュミットの生誕100周年を記念したシンポジウムの記録が論文集として、南山大学の選書の4巻目として1971年にも出ています。浅からぬご縁をもっていらっしやる研究所だということが言えると思います。

このように、シュミットの私生活のようなことをやや詳しく述べることはできたのは、アメリカの人類学者であるアーネスト・ブランドウィーという人が『When Giants Walked the Earth』という、シュミットに関する評伝を出していますが、これにかなり詳しい記述があるおかげです。

ただ、この評伝は、ギングリッチさんなどからすると、「あまりにも好意的」に書かれていると、つまり、彼からするとシュミットはそんなに評価すべき人物ではないということだと思っておりますが、ただ、私は個人的には、人間のもつ多面性ということを評価するという意味では、ブランドウィーさんの評伝はよくできていると思いますし、面白く読みました。

そういった公的にも私的にも多様な面をもつシュミットという人物について、今後こういう場で過去のことにだけに向くのではなくて、未来に向けて何か評価すべきことがあるのだろうかということのを少し考えてみたいと思いました。

彼の出した学説では、「文化圏説」という、世界大的な人類文化史の再構成ということを目指

しています。ただ、それがあまりにも図式化に陥ってしまったために、晩年には維持できなくなったという経緯もあります。それから、もう一つ、「原始一神教説」という、つまり人類は最初の段階で一神教、一つの神を信じる信仰をもっていたというカトリック神父としての学説です。こちらにもよく批判の対象になるのですが、何かすくい出せるものはないのだろうかということを少し考えてみたいと思います。

まず、オーガナイザーとしての側面です。彼は同僚の神父でもあり人類学者でもあった人々を狩猟採集民の社会へ調査に派遣して、民族誌を続々と刊行させたという大きな功績があります。ヴィルヘルム・コッパースが南米のフエゴ島、パウル・シェベスタはマレー半島やフィリピンの、いわゆるネグリート系と呼ばれる低身長の人々のところ、それから中央アフリカにも行っています。マルティン・グジンデはフエゴ島、それからコンゴのピグミー系諸民族のところに行っています。

とくに狩猟採集民の下に送り出したということは、当然シュミットは、一番、人類の古い段階の生活がある程度残しているのではないと思われる人々の下に一神教的な考え方がないかということが一つの大きな関心事だったわけですが、結果として生み出された民族誌というのは、そういった宗教的な、あるいは世界観に関わるような問題だけではなく、生業や社会構造、また言語など、とくにグジンデとシェベスタは類いまれなフィールドワーカーたちだったので、シュミットの「大きな理論」に呼応する形で「現場の理論」が構築されたということが言えるのではないと思うわけです。

グジンデはフエゴ島でたくさん写真を撮っていたようで、最近になって、2015年にフランスのアルルでグジンデの1,000枚以上の写真が整理され、一部が公開されて写真集にもなっています。

これがフエゴ島(Tierra del Fuego)でのグジンデの写真です(写真1)。

最初は布教もある程度目的として現地に入ったわけですが、逆にそこの人々の生活に魅せられてしまいます。現地の人々の信頼も勝ち得て、外部の人には見せないようなイニシエーションにも参加させてもらうことができたということです。



写真1

これがグジンデとコッパースです
(写真2)。

今も言いましたが、彼らの写真が
多数撮られています。これは非常に
質の高いもので、2人が残したエスノ
グラフィーと併せて非常に高い価値
をもつものです。これが再評価され
てきています。



写真 2

グジンデの写真集は2015年にフ

ランスのアールの美術館で整理され、シェベスタについても、評伝、それから彼がウィーンに書
き送った書簡と併せて公開されています。ヴィルヘルム・デュプレさんという、オランダのネイ
メヘン大学名誉教授である宗教哲学者がまとめて、出されています。シェベスタもやはりたくさ
んの写真を残してしまっていて、これが今、ウィーンにあるオーストリア国立図書館のサイトで一般
公開されています。1,000枚以上の写真があります。

こういうグジンデやシェベスタの業績に関しては、概してシュミットたちに辛口なギングリッ
チさんもある程度の評価を与えています。

このようなことが可能になった背景には、先ほども言いましたが、シュミットの手腕もあると
思います。彼は政治的、宗教的な権力者との結び付きもありましたし、資金も、教皇ピウス11世
から調査資金を得ており、そういう外交的な手腕にも長けていたということも、同僚たちの活
動を可能にした背景にあったと思われる。

2番目として、供犠の理論ということを書きおいたのですが、これは、さらっとい
きます。

シュミットが考えたことの一つとして、狩猟採集民社会における獲物の扱いと牧畜民社会に
おける家畜の供犠との間に連続性があるということを言いついて、その後、近年になって、この
学説がカール・モイリの学問的伝統を引き継ぐフリッツ・グラーフらに、ある程度評価されてい
ます。このことは、シンジルトさん・奥野さんが編集された『動物殺しの民族誌』という本の中で
私が書いたものがありますので、今日はあまり触れないでおきたいと思います。

3番目が、今、私に関心を抱いていることの大きな一つで、狩猟採集民の世界観です。原始
一神教ということだけで否定してしまうのではなくて、ここから何かすくい出せるものがあるの
ではないかと私は考えております。

白状しますと、7年も前になりますが、『台湾原住民研究』という雑誌に試論を書いたときに

は、私は狩猟採集民の世界観の中では「動物の主」、「アニマルマスター」というものの存在がやはり主要なもので見逃せないのではないかと、台湾にもこういうものがあるのではないかと探してみたら、どうもありそうだったので、そんなことを書いたことがあるのですが、それだけではないのではないかと考えたわけです。

東南アジアに関して「動物の主」に関わる論文を書かれた方は他にもいらっしゃる、大林太良先生が1970年に、東南アジア大陸部の焼畑農耕民の間で「動物の主」的な存在が見られるということを既にも書かれていますし、南山大学で学ばれた古澤歩さんが修士論文を基にして、『南山神学 別冊』の中に「山の神と動物の女主人」という優れた論文を出されています。この中でも東南アジアにちらっと触れていらっしゃいます。私の論文も引用して下さって、この抜き刷りもいただきました。彼は、クネヒト先生にも学ばれたと聞きましたが、その後、研究を続けるのをやめて高校の先生になってしまったようで残念です。

東南アジアについては、「動物の主」的なものもあるかもしれませんが、ここで出てくるのは、やはり農耕民の間での関連です。狩猟採集民は一体どうなのだということが、ちょっと分からずにいたわけです。あらためてシュミットの学説を振り返って、よく検討してみる必要があるのではないかと私は思い始めているところです。まだ取っ掛かりをつかんだあたりなので、お恥ずかしいのですが。

そもそもシュミットは1910年に『人類進化史におけるピグミー諸族の位置』という本を出しており、この中で、人類の古い段階の文化は低身長の人々の間によく保存されているはずだと、これを研究することが大事だということを言って、同僚たちを送り出して行くわけです。

同じころにラドクリフ＝ブラウンもアンダマンに行き、有名な『アンダマン諸島民(The Andaman Islanders)』というエスノグラフィーが1922年に出ます。このラドクリフ＝ブラウンの著作の巻末にはアジアのネグリート系の人々の分布図が出ていまして、一番西側がアンダマンです。それから、マレー半島のセマンやフィリピンのアエタの人々が含まれてくるわけです。この人々も、今ではもう調査は難しいかもしれませんが、当時だから、まだサルベージ的にすくい上げることができた貴重な資料ではないかと思います。

現地調査が当時、進行していきました。ヴァンオーヴェルベルクという方も神父です。彼は神言会ではなくて淳心会の神父ですが、フィリピンに長年住んでいました。シュミットは彼に調査費用を工面して、アエタのところを研究してくれないかといって送り出したわけです。ヴァンオーヴェルベルクさんも、やはり現地の人に溶け込んで、長い論文をいくつも『アントロポス』に寄稿しています。

ただ、それよりも早く、私もこれは本当に最近知ったのですが、アイルランド出身のJohn M.

Garvanという人がアエタ調査に行っていました。この人もすごく変わった経歴のもち主のように、フィリピンがアメリカ領になったということで調査に飛び込むわけですが、アル中になってしまって、森の中でショップキーパーなどをしながら、アエタの人たちと関わりながら調査をしたということです。

でも、その成果たるや、すごい資料で、今は出版されていますが、なかなか出版されずに原稿の状態でご回っていました。それを手に入れたのがジョン・クーパーです。彼も神父です。アメリカのカトリック大学の司祭兼人類学者だった方ですが、彼がすごくいい論文を、自分自身で出した『Primitive Man』という雑誌の中に出してしまっていて、この中で、アンダマンとセマンとアエタの文化にどういう共通性があるかということを論じています。55のポイントを挙げて、その中でアジアのネグリートの人々に見られる共通要素を抽出しています。結論としては、この3つのグループというのは遠い過去からの共通の呪術・宗教的な文化を保持しているという結論に至っています。これについてロバート・ローウィーは、「健全な判断力と資料の精査が組み合わさると何が達成できるかという最も良い事例である」というように激賞しています。

これを見ますと、本当に興味深いです。「動物の主」的な世界観というのは、ほとんど現れて来ません。興味深いのは、雷やセミ、そういうものが重要な役割を果たすわけです。雷や嵐というのが、本当に彼らにとっては恐怖というか、恐るべきものであるわけです。セミは脱皮しますから、そこに神秘力を感じたのかもしれませんが、セミだけではなくて、いろいろな虫、小さな昆虫のようなものが出てきます。シカやクマのようなメガフォーナといいますが、大型の動物が「動物の主」として現れるというような世界観とはかなり違う物の見方をしているわけです。

例えば、雷は天の上で天人が石を転がしている、あるいは天人の声であるということ、また、セミが鳴いているときに邪魔をすると天の神が怒って嵐を起こすということ、セミが鳴いているときは大きな声を出してはいけないということなどを言うわけです。スズメバチは雷の使いであるなどと、何か虫に愛着もっています。セミは偉い神様の子どもであるというような見方もしています。

このようなことをざっと見ていきますと、東南アジアのネグリート系の人々、狩猟採集民の神話宗教的な世界観の中では、大きな「動物の主」的な存在よりも、むしろ虫など小さい動物が大きな位置を占めており、さらには、雷に対する恐怖というものも卓越しています。

中には、アフリカの狩猟採集民との類例というの、少しですが比較できそうな事例もあります。そうしますと、初期の人類の世界観の探究、これは今、世界的に神話学を研究する研究者たちの中ですごく盛り上がっているトピックなのですが、そういったことを考える上でも非常に興味深いフィールド、領域ではないかと思えます。私の今後の研究課題の一つにもなっていく

ように思っています。

簡単に結びとさせていただきます。結論としましては、シュミットとその学派から今の我々が学ぶことがあるとしたら、巨視的な構想をもって研究を進める姿勢や組織のあり方です。やや硬直化してしまったという負の面もあるかもしれませんが、それから、とくに東南アジアのネグリート系の人々に代表されるような数々の具体的な事例や理論を発展させる可能性もあるのではないかと思います。

ちょっとこれは余計なことかもしれませんが、今日の午前中にパワーポイントをいじっていたら書き加えてしまったので、お話ししますが、学史、研究史を評価するときには、これは私の持論なのですが、3つの次元を考えていいのではないかと思います。つまり、個人としての研究者の生い立ちや私生活に関わるような事件、学問的な系統や思想的な影響関係、それから、大きな社会背景あるいは時代背景。そのような3つぐらいの次元で考えるといいのではないかと思います。

そういう意味では、やや私はシュミットさんの個人的な面に偏ったお話をしてしまったかもしれません。ドイツ語では、そういうことを「プスュヒョロギジーレン (Psychologisieren)」という、心の話に矮小化するというような悪口も言われるのですが、その辺は自覚しています。

最後に弁解をさせていただきます。ズデンドルフというオーストラリアで教えている心理学者の『現実を生きるサル 空想を語るヒト—人間と動物をへだてる、たった2つの違い』という本が、2015年に邦訳が出ました。この中で彼が言っている、他の動物と人間を隔てる、たった2つの違いというのは、簡単に言うと、想像力と共感力です。これが異常に発達というか、他の動物と比べて異常にこの領域が大きくなってしまったのが人間であるということを言っているわけです。

ですから、今後、AIの時代を生きていく人類学のあり方、あるいは、人間らしさとして残っていくものは何かということを考えるときに、想像力や共感力をもって生きていくということが大事だと思いますし、学史を見直すときにも、そういった姿勢が必要とされるのではないかと思います。

最後の絵は、今の弁解の後だから言いやすいのですが、ヴィルヘルム・シュミットが自室に掛けていたと言われるニコラース・マースの「La songeuse (物想う女)」という絵です(図2)。

シュミットは、2歳で実の父親を亡くしたせいか分かりませんが、母親をととても大事に思っていたようです。先ほどの『人類進化史におけるピグミー諸族の位置』という本も母親に献呈されていますし、これは母親によく似ているということで部屋に掛けていたそうです。よく見ると、シュミットさんの肖像画の、あのがっしりした顔立ちとこの女性の顔立ちが似ているようにも思

われますが、そういったシュミットさんの一面も知った上で彼の著作を読むと、また違った読み方もできるのではないかと思った次第です。

ご清聴ありがとうございました。

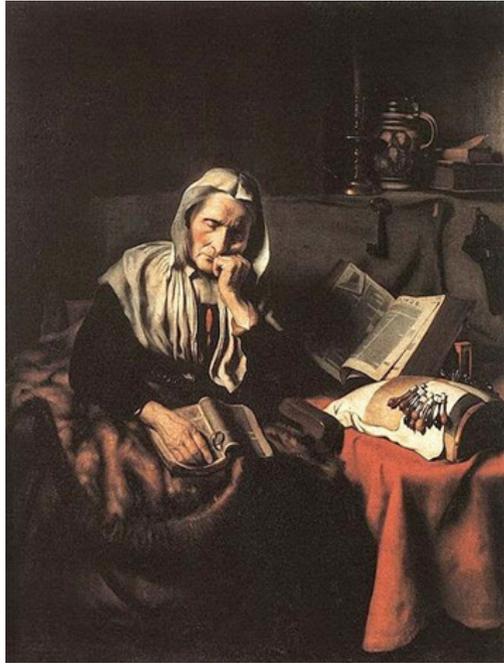


図2 Nicolaes Maes, La songeuse, 1656

参考文献

- Bastian, Adolf
1860 *Der Mensch in der Geschichte*, 3 Bde. Leipzig: Otto Wigand.
- Barth, Fredrik, Andre Gingrich, Robert Parkin & Sydel Silvermanl (eds.)
2005 *One discipline, four ways: British, German, French, and American anthropology*, Chicago: University of Chicago Press.
- Brandewie, Ernest
1990 *When giants walked the earth: the life and times of Wilhelm Schmidt, SVD* (Studia Instituti Anthropos, v. 44), Fribourg, Switzerland: University Press.
- 古澤 歩
2008 「山の神と動物の女主人——比較文化的研究」『南山神学 別冊』23: 1-60。
- Radcliffe-Brown, A. R.
1922 *The Andaman Islanders*, Cambridge: Cambridge University Press.
- シュミット, ヴァイルヘルム
1962 『母権』(南山大学選書2)山田隆治(訳)、平凡社。
- Schmidt, Wilhelm
1910 *Die Stellung der Pygmäenvölker in der Entwicklung der Menschheit*, Stuttgart.
- ズデンドルフ, トーマス
2015 『現実を生きる サル空想を語るヒト——人間と動物をへだてる、たった2つの違い』寺町朋子(訳)、白揚社。
- Tylor, Edward B.
1871 *Primitive Culture*, 2 Vols. London: John Murray.
- Waitz, Theodor
1859-72 *Anthropologie der Naturvölker*, 6 Bde. Leipzig: Friedrich Fleischer.
- 山田 仁史
2012 「台湾原住民における〈動物の主〉試論」『台湾原住民研究』16: 53-68。
2016 「供犠と供犠論——動物殺しの言説史」『動物殺しの民族誌』シンジルト・奥野克巳(編)、pp. 249-291、昭和堂。
2018 「ヴァイルヘルム・シュミット」『はじめて学ぶ文化人類学——人物・古典・名著からの誘い』岸上伸啓(編)、pp. 9-15、ミネルヴァ書房。

講演2

Missionary and Anthropologist, a Contradiction?



クネヒト・ペトロ
(南山大学・元教授／人類学研究所・元所長)

ご紹介にあずかりましたクネヒトです。私の話は先ほどの山田先生のようにスムーズなものではないかもしれませんが、ですので、その点、あらかじめご理解いただければと思います。

おそらく、この話のタイトルを見て、ちょっと変だと思われかもしれません。実に変です。今年の秋、1カ月ぐらい前に、京都で開催されていた研修会で聴講生の1人に「あなたは司祭でありながら、どうして人類学をやっているのですか。矛盾しているのではないですか」と聞かれました。言われて、「ああ、なるほど」と思いました。考えてみれば、宣教師の活動を批判する人類学者は決して稀ではないので、宣教師が人類学者として活動するのは相矛盾している事情に見えるでしょう。しかし、よくよく見ると2者の活動の目的は異なっているにも拘らず、それぞれの目的に達する方法に案外互いに似ている点があるのではないかと思います。というのは、両者の活動の根拠は対象にしている文化を出来るだけ正確に理解することです。それ故、一目で矛盾しているように見える人類学者と宣教師のそれぞれの基本的態度はむしろ互いに相互協力関係にあり得るのです。実は、このような考え方は南山大学、とくに南山大学人類学研究所の設立と活動の動機であるので、これについて少し話をしたいと思います。

私の話は、先ほど山田先生が述べたような、きちんと整理された学問的な話ではないので、一つの物語として聞いていただければ幸いです。

基本的に、人類学研究所と何らかの関係があった3人の人たちについて話すつもりです。一人目は、先ほど、山田先生が話したW. シュミットです。もう一人は、おそらく本日の聴衆のなかで彼を知っている方がほとんどいないM. エーデルという人です。そして、最後は、この私です。どうしてそうしたかという、この3人を結んでいる絆が宣教師であるから、そして南山大学人類学研究所と関係をもっていた人類学者であるからです。

南山大学人類学研究所設立70周年記念シンポジウムの席で上記のテーマで話すというのは、異質で関係のない出来事に見えるかもしれませんが、実はこのテーマは研究所の設立準備の段階以来大いに関係があった問題と課題であったことを指し示しています。

南山学園の母体が神言会というカトリック宣教会であるため、宣教会の宣教活動と高等教育が互いにどのような関係にあるべきかという問題は、早いころから議論の種でした。あるいは、現在でも存続している問題であるような気がしています。本日、3人の会員が研究所の設立とその後の研究活動にどのように関連していたかについて語り、研究所の存在理由について話してみようと思っています。

神言会とは、1875年に教区司祭であったドイツ人のアーノルド・ヤンセン(Arnold Janssen)が設立したカトリック宣教修道会です。しかし、創立者は、最初のころから、会員の世俗的な学問の勉学を重視して、専門研究の才能を見せた若い会員たちに大学での自然科学の研究を

含めて、研究を許可しました。この方針に従って選ばれた若い会員の一人がウィルヘルム・シュミット(Wilhelm Schmidt)でした。

彼はベルリン大学で1893年から1895年まで学びました。こう言いますと2年勉強したように見えるのですが、実はそうではありません。1年ちょっとだけです。どうしてそうなったかという、創立者が「長く勉強すると高慢の気持ちが起こる可能性があるので、これを避けるべきだ」、何故なら、会員学者が「謙遜な者でなければならない」と創立者が考えたからです。

約1年半、大学でヘブライ語と古典アラブ語などの中近東の言語を学びました。こうした言語の研究は、これらの言語が聖書の解釈学をはじめ、中世の哲学、つまりスコラ哲学にどのように影響を及ぼしたかを明らかにする場合に役立つと彼は考えたわけです。さらに、この言語の研究は比較宗教学研究において多大な意味をもっているとも考えていました。別の言い方をすると、彼は、これらの諸言語の「世俗的」な研究に力を入れたら、言語学そのものをマスターできるのみならず、宗教の研究と、とくに後輩が学ぶべき神学の研究のためにもなると考えていたわけです。

ベルリン大学を離れた1895年からシュミットは、ウィーン郊外にあるSt.Gabrielという神言会の若い宣教師を養成する神学院で、主として言語学を教え教鞭を執っていました。そのとき、彼の将来の研究活動に極めて大きな影響を与えた2つの出来事がありました。

一つは、ウィーン大学の教授、L. ライニシュ(Leo Reinisch)との出会いです。教授はハム族の研究者で、とくに比較言語学の著名な方でした。教授の指導の下で、シュミットは比較言語学の方法を身に付け、洗練させました。その訓練の結果、初の専門的な学術研究成果を刊行しました。これは、メラネシアやポリネシアなどのオセアニア地域の諸言語の事情と民族学におけるそれらの意義についての論文でした(Schmidt 1899)。

また、もう一つは、ライニッシュ教授に誘われて、英国の人類学者アンドリュー・ラング(Andrew Lang)がウィーン大学でおこなった講演に列席したことです。講演の課題は、原始民族の神信仰でした。シュミットはラングの考えにそのまま同感したわけではありませんでしたが、原始民族の信仰のあり方を歴史学的方法で明らかにしようというラングの試みから重要なヒントを得ました。つまり、自ら追究してきた比較言語学研究の歴史学的方法で、広い地域にわたって特定の諸言語の広まり方を立証しようとするシュミットの方法と似た方法でラングは原始民族の神信仰の歴史的位置を示せるのではないかと気がついたわけです。また、もしこの研究が成功すれば、人類学・民族学という世俗の学問が宣教師たちの努力を後押しできるとも判断したわけです。

分析できる資料の問題について、シュミットは、宣教師が現地の宗教や慣習などについてユ

ニークな経験と知識をもっているのです、それを欧米の研究者たちの手元に提供すれば、高度な信憑性の資料を基にした学問の進歩を促すことになるに違いないと考えました。従って、シュミットは、一方で、神学院で宣教師の若い候補者たちに異文化についての関心と正確な観察力を養うのに努力しますが、他方では、宣教師の現場から届いた報告をまとめて、それを専門雑誌でもって学界に提出するために民族学と言語学専門誌『アントロポス』(Anthropos)を1906年に発行し始めました。

なお、宣教師が蒐集した資料を大勢の研究者たちに専門的に分析し研究してもらうために何人かの神言会の学会員を集め、雑誌を発行し始めた頃より約30年後の1932年に、シュミットは「アントロポス研究所(Anthropos Institut)」という名の民族学研究所をSt. Gabriel修道院内に設立しました。

シュミットは、普通の意味での宣教師でもなければ、特定の社会において所謂フィールドワークという現地調査を実行した人類学者でもありません。彼は全力を尽くしたデスクワーカーであり、主として大学または自分の書齋で働く人でした。

しかし、1935年3月からその年の年末にかけて、世界一周旅行をする機会が彼に訪れました。旅行の途中で、中国と日本にも立ち寄りました。そして、文化の高いこの2カ国で一生懸命に働き尽力している宣教師の態度を認め、評価しながらも、それを時に厳しく批判したこともあります。

かれが批判したのは、宣教師の努力の熱心さではなく、努力の対象にしている文化に関して示した関心と知識の足りなさでした。彼の見解によると、中国と日本では教会の宣教努力を成功させようとしたら、主として田舎の農民人口を相手にするよりも、まずインテリの人々をそれにすべきであるということでした。しかし、そうであれば、宣教師は活動するそれぞれの国の文化を深く学ぶ必要があるとし、母体の神言会にはその目的に大学や研究所を営むことが大事だと主張しました。

旅行の当時、日本ではまだ神言会が開いた大学はありませんでしたが、シュミットがヨーロッパで設立したAnthropos Institutに因んだ支部として民族学研究所を創立するように強く望んでいました。その願望を南山学園の担当者に提出し、一応受け入れてもらったわけですが、その後、太平洋戦争が激化したために、この話は棚上げされてしまいました。戦後、南山大学が設立された1949年の秋に、南山大学の初代学長アロイジオ・パッヘ(Aloysius Pache)師の支持を得て、「人類学・民族学研究所」がよいよ創立を見たわけです。

そして、シュミットの弟子である神言会員の沼澤喜市が初代所長に就きました。しかし、新研究所の組織は、形質人類学をはじめ、民族学、考古学と言語学を含めたものだったので、シュミ

ットは沼澤所長に宛てた手紙の中で強い不満を表したそうです。

南山大学の発展に伴い、研究所は1954年に「人類学研究所」に改名しましたが、大学校内での立ち位置は一朝一夕には確立しませんでした。そして、研究所に機関誌が必要だと判断され、『Man and Culture』という題の専門誌の編集と発行が企画されたのですが、運悪く実現しませんでした。大学紛争の不安定な時代を経た後、研究所の組織は一時凍結されましたが、1972年の再出発時にやっと『人類学研究所紀要』を発行することができました。

当時、人類学研究所の研究者として神言会の研究者は極めてまれな存在となっていました。10年ほど前に、名古屋の外から、わずかですが援助がありました。Anthropos研究所の所員でもあった神言会員のマティアス・エーデル(Matthias Eder)でした。彼は東京に住んでいて、週に一回ぐらいの割合で南山大学へ通っていましたが、1973年に名古屋へ引っ越し、回復された研究所で部屋を与えられました。彼が来たときに、自分が編集していた雑誌『Asian Folklore Studies』、正確に言うと、当時の『Folklore Studies』を持参して人類学研究所で発行を続けましたが、実際、この雑誌は既に1963年から人類学研究所の名で発行されるようになっていました。しかし、それは名前だけでした。

この雑誌はもともと『Folklore Studies』という題目で刊行されていましたが、人類学研究所のものではありませんでした。エーデル師が1942年に北京の輔仁(Fu Jen)大学の「東洋民族学博物館」の機関誌として刊行し始めた民俗学の専門誌でした。中国の政治事情が変わったに伴い、エーデル師は1949年に慌てて出国し、雑誌とともに中国から日本へと渡り、差当たって東京で雑誌を継続して発行するのに尽力しました。

近いうちに再び北京へ戻れるだろうと推測しながら、最初の3年間は、「東洋民族学博物館」の名で雑誌を発行して続けていましたが、1963年以来、名称が『Asian Folklore Studies』に改名されるとともに、正式に南山大学の人類学研究所で発行するようになりました。

編集担当者のエーデル師は、若い宣教師であった頃に、日本の宣教地に赴任するように任命を受けて来日しました。短期間で日本語を学んだ後、教会の務めもしましたが、主として高等学校で教鞭を執っていました。しかし、日本で従われていた宣教方法に不満をもち、それをよく批判していました。なぜなら、日本文化を深く知らなければ、本当の宣教が不可能ではないかと確信していたからです。そうした不満が次第に強くなるにつれて、自分はこのような宣教法に向いていないと感じてきました。代わりに、自分が日本文化を専門的に研究すれば、身に付けた文化に関する知識を宣教師たちに提供しながら、かれらの活動に大いに貢献できるのではないかと信じていました。

1935年、いよいよ彼の夢がかない、ヨーロッパの大学で日本文化研究を追究する許可を得

ることができました。3年後の1938年にベルリン大学で博士号を取り、再度東洋へ出発しましたが、今回は日本ではなく、北京の輔仁(Fu Jen)大学へ派遣されました。

やがて、当大学の「東洋民族学博物館」を設立し、1942年、その機関誌として『Folklore Studies』を発行し始めました。その雑誌を発行し始めた理由は、とくに西洋と西洋以外のフォークロア学者たちの研究交流の場にするという考えでした。なぜなら、洋の東西を超えて、学者たちが異文化の相手の研究から学ぶべきことが多いと思っていたからです。

私は、来日して東京で日本語を学んだ際、初めてエーデル師に出会い、同じ家に住んでいました。彼の編集作業に関心をもち、日本語を勉強する傍ら、時には彼の編集業務を少し手伝う機会もありました。

日本に赴任した際、私は将来、教会で仕事をするか、それとも神言会が経営している学校に勤めるか未定でした。しかし、教会での仕事に向いていない気持ちは最初から強かったです。しかも、日本語の勉強が進んでいくにつれて、日本語の意味と自然な使い方方を正確に学ぼうとするなら、学校で身に付けた日本語力には重要どころが足りない、私はおおおいに感じてきたわけです。社会の中に生きている言語と、その社会の環境を現場で経験したい気持ちが沸いてきました。

ある日、沼澤喜市師にその考えを打ち明け、将来の仕事について相談すると、師は、できるなら日本の大学で勉強すればいいだろうと勧めてくださいました。従って、日本語学校を出た後、東大の大林太良先生を紹介してもらい、先生の指導を受けながら受験の準備を始めました。先生が読むように勧めてくださった書物には英語の文化人類学入門書が含まれていましたが、私に深い印象を与えたのは、折口信夫の『古代研究 民俗学篇』の2冊でした(折口1929, 1930)。

ここまで日常的な日本語を学んでいたので、折口の本を読もうとしたら、漢字も文章もあまりにも難しかったので、諦めて投げようかと思ったこともあります。しかし、今、振り返ってみると、折口の本は私に2種類の大事なことを教えてくれました。一つは当用漢字以前の漢字の読み方で、もう一つは日本の民俗文化の魅力でした。それで将来の、私の歩めそうな日本人をより深く知る道が決まった気がしました。

運良く東京大学に籍を得て、日本で文化人類学を学ぶ門が開かれました。しかし、ある重要な問題が一つ残っていましたし、それをだんだん、一種の重荷と感じつつありました。当時住んでいた家は、ほとんど外国人ばかりが生活している、日本国内の「居留地」めいた世界でした。肌で日本文化に触れる機会をいかにつくろうかと思い巡らした際、大学の先輩にこの考えを明かしました。彼は快く私の希望を聞いて、やがて現地調査ができそうな地域を紹介してく

れました。それが、ここにいらっしゃる伊藤亜人先生です。その当時はまだ先生ではなく、文化人類学研究室の助手でした。

お盆の時に、彼とその家族の案内で東北の何カ所かに下見に出掛けました。その時に、イタコの儀礼を観察する機会もありました。山村を歩いて、数人の住民と調査の可能性について相談する機会ももちました。東京へ戻って、見てきた村々のうちの一つを選んで、今度の調査地に決めました。下調べの旅行から一旦東京へ戻ったが、出来るだけ早く調査を始めようと思い再びその村へ出発しました。しかし、調査は思ったように楽なものではありませんでしたが、今、振り返ってみるとこの状況こそが日本の日常生活に「潜る」のに、苦しくても貴重な「入社式」となりました。

その頃、寂しい思いをして独りで山道を歩いたことも何回もありましたが、村民のある会合に参加した際、いきなり「あなたは仲間なので、我々の話分かるだろう」と言われ、嬉しかったです。忘れ得ない瞬間でした。

大学時代に研究や調査を進めるうちに、宣教師としての教会活動をほとんどしなかったどころか、次第にそうした活動に一生力を尽くすのに向いていない感じが決定的になりました。大学院を修了して南山大学に着任し、宗教人類学などの授業で教鞭を執り始めました。カトリックの宣教師なので、いわゆる福音を宣べて伝えることが第一の使命のはずですが、大学の講義では、そうするよりも、学生たちに対し、「宗教」という人間社会の一現象に関する基本的な理解と、偏見のない評価の態度を育てるのが先ではないかと判断しました。

というのは、「宗教」あるいは「信仰」を、各地の文化の中で一つの側面として生まれてくるものだと考えれば、文化を理解することによって宗教の理解が深まり、より豊かになるのではないかと感じたからです。そういう意味で、私は、人類学的な文化研究が宣教師にも欠かせないばかりか、彼らの業務に、間接的ではあるが手助けとなる視座を提供し得ると考えています。

エーデル師は1980年に急逝しました。以前から時々彼の編集作業を時間が許す限り手伝うことがあったが、いよいよ自分が本格的に『Asian Folklore Studies』を編集する時が来ました。

原則的にエーデル師が確立した編集方針に倣いながら、アジアの研究者、あるいはアジアの諸文化に関する研究を優先させることにしました。しかし、作業上、重大な問題があるとすぐに分かりました。というのは、アジア出身の研究者が編集室に提出した論文のレベルは欧米の研究者のそれと比べると、そのレベルに達し得ないものが稀ではなかったのです。一方で、彼らが提示する資料の中には、外国の研究者にも役立つと思われるものが少なくなかった。しかし、こういうものを、他の論文と並べて発表できるかたちにするのに多くの手間がかかり、私に

はできない技だと理解せざるを得ませんでした。従って、その技をコピーエディターに頼むことにしましたが、その方の手を随分煩わすことがしばしばありました。

しかし、いわゆる「異文化」を少しでも理解しようとするならば、その文化に生きる人々の声を丁寧に聞き拾うべきであると確信していました。確かに、こういう扱いを基にした作業は、宗教と直接に関係もない場合が多かったのですが、異文化の宗教に関して私自身の態度とは少しも異なるものではありませんでした。私が大学を定年退職した年、長年編集を担当してきた雑誌の題は『Asian Ethnology』と改名され、編集方針も変更されました。

南山大学から離れた後、私は、あるキリスト教系大学所属の宗教研究所で、日本の諸宗教に具体的な体験を以て接触しようとする外国人の研修生たちに日本の庶民の信仰観と、それによる生活の仕方を紹介する機会を得ました。キリスト教徒である彼らを日本の日常的信仰に改宗させようとは、もちろん毛頭ないことです。むしろ彼らに、自分も持っている信仰をよく知り、それを踏まえて一般の日本人の素朴な信仰をある程度知り味わうということ、さまざまな形で体験させるのが私の目的です。そのような体験も含めて他宗教について学んだ結果、自分も持っている信仰の中でも新たな側面と表現の可能性を発見できるようになったと語っている研修生もいます。

自己弁護かもしれませんが、自らの信仰のあり方を真剣に考えようとするキリスト教徒から最初に紹介したようなコメントがあるので、私はやはり「宣教師と人類学者」は決して矛盾していないと感じていると述べて、この話の締めくりにさせていただきます。

ご清聴、ありがとうございました。

【司会(宮脇)】 クネヒト先生、ありがとうございました。時間が少しありますので、フロアのほうから先生にお聞きしたいことなどがありましたら、受け付けたいと思いますので、どなたか質問やコメントのある方は挙手をお願いいたします。

【宮沢】 人類文化学科の宮沢千尋です。今日はクネヒト先生のパーソナル・ヒストリーということも交えながら、人類学研究所との関わり、あるいは、人類学研究所の活動についてお話をいただいて、非常に学ぶところが多かったと思います。

最初の山田先生のお話にもありましたが、人類学研究所のあり方に対して、人類学研究所をつくることを提唱したシュミット自身は、実際の研究所のあり方には不満をもっていただいていたというお話がクネヒト先生からもあったのですが、その辺を具体的に、もう少し詳しく教えていただきたいと思います。

【クネヒト】 この不満ということは、私はタイトルの中でも仄めかしているある問題なので

す。つまり、人類学の研究をどのように宣教活動に役に立つものにするかという問題なのです。これは、シュミットという宣教師が人類学者として一生考えていた問題です。

なお、南山大学の人類学研究所を設立した人も、あるいは、そこで働いていた人も、最初の段階においては、みんな神言会の宣教師です。場合によっては、専門的に研究ばかりに没頭して、他に何も考えていない人もいれば、そうではなくて、ずっと学問に対して何かの疑問をもっていて、「私の仕事は本当にこれでいいのでしょうか」というような人もいました。

シュミットの時代からあった考え方、つまり専門的な研究はどうしても必要で、それを真面目にやらないと駄目なのです、そういう考え方があったが、しかし、宣教活動に向いている人にも任せればいわけです。ただし、宣教師たちが相手の文化を知らないと、ちゃんと勉強しなければ、うまく宣教活動もできないというように彼らは考えたのです。

そうすると、一つのギブ・アンド・テイクではありませんが、それに似ているような感じといえます。つまり、私が言いましたように、シュミット自身は宣教師でもなく、一般的な意味での専門的な学者でもありません。先ほど山田先生が言われたように、彼のあの大きな著作は、すべて独学で作られました。大学で勉強したのは1年か一年半ぐらいの言語学だけです。しかし彼は、働くことについて秀でた能力をもっていました。もちろん、みんながそうだというわけではありませんが、彼がいつも言っていたのは、宣教師の知識をより正確にするために、彼が言語学を教えていた神学院において、若い人たちに聞き方や習慣の観察の仕方を教えて、そして送るといことです。

彼は、いわゆるフィールドワークもやっていません。しかし、彼の弟子の中には、フィールドワークをとて活動的におこなう人がいました。南山大学で一時教えた M. ゲジンデを初め、ピグミーの研究者であった P. シェベスタなどのフィールドワークはシュミットがアレンジして、彼らに必要な費用を集めるまでに世話したわけです。そういうものです。ですから、そういう意味で彼は確かに、いわゆる大きな傘の下で見れば、宣教活動に大きく貢献したと私は思います。

【司会(宮脇)】 では、時間になりましたので、ケネヒト先生のご発表はこれで終わらせていただきたいと思います。先生、どうもありがとうございました。

参考文献

折口 信夫

1929 『古代研究 民俗篇 1』大岡山書店。

1930 『古代研究 民俗篇 2』大岡山書店。

Schmidt, Wilhelm

1899 “Die sprachlichen Verhältnisse Ozeaniens (Melanesiens, Polynesiens, Mikronesiens und Indonesiens) in ihrer Bedeutung für die Ethnologie,“ *Mitteilungen der Anthropologischen Gesellschaft in Wien*, pp. 245-258.

講演3

人類研の目指したものの、 そして目指すべきもの



後藤 明

(南山大学人文学部・教授／人類学研究所・第二種研究所員)

今ご紹介いただきました、南山大学の後藤です。私は2010年から2018年3月までの4期、所長を拝命しております、その話を後半でしたいのですが、まず前半では、1949年に設立された人類学研究所の、当時は人類学・民族学研究所でしたが、第1期のお話をします。さらに1979年に改組がおこなわれて、それを第2期といたします。そして、その後、一時活動が停滞した時期があるのですが、2010年にいわば再スタートしたという話を後半でしていきたいと思います。

既に山田先生やクネヒト先生のお話でもありましたが、1949年に人類学・民族学研究所として設置されたのが人類研のスタートです。当時は学長がパツへ、沼澤喜市先生が所長、それから、京都大学から中山英司さんが赴任して、当初は沼澤・中山で運営をしており、さらに言語学のレンメルヒルト氏に加わり、3人でスタートしました。

これについては、私のレジュメの参考文献に書いてあります『人類学研究所通信』第17・18号を、PDFで人類学研究所のウェブサイトから誰でも読めますので、読んでください。これに関しては、考古学の教授であった早川正一先生および大塚達朗先生に過去のことをお話しいただいたことに基本的に依拠しておりますので、詳しくはそちらを読んでいただければ分かります。

人類研開始期は、こういう構想でした。これは構想であって実現したわけではないのですが、ご覧になるとわかるように有名人がずらっと並んでいます(表1)。敬称は省略させていた

初代所長	沼澤喜市(民族学者)
副所長	中山英司(形質人類学者)
民族学部	沼澤喜市、マテオ・エーダー
言語学部	浅井恵倫、フランシス・ギート、アントン・レンメルヒルト
人類学・考古学部	中山英司、清野謙次
賛助員	岡正雄、石田英一郎、水野清一、駒井和愛、金関丈夫
顧問	ヴァイルヘルム・シュミット、デル・レ、長谷部言人、原田淑人、渋沢敬三、梅原末治、松本信廣、金田一京助、柳田國男
助手、写真技手、図工、タイピスト、調査補助員、庶務会計事務員	

(渡邊 学(編)2010b 「人類学研究所小史」『人類学研究所通信』17/18、p3を参考に作成)

表 1

ですが、例えば、岡正雄、石田英一郎、水野清一などそうそうたる名前、また原田淑人は東京大学考古学研究室の初代主任教授、駒井和愛は同じく2代目の主任教授です。顧問にシュミットの名前もあります。長谷部言人は東大の人類学、人骨研究の第一人者です。渋沢敬三、松本信廣、金田一京助、柳田國男などはいうに及びませんね。梅原末治は京都大学考古学研究室の主任教授です。全員、説明を要しないような超有名人です。オールジャパンという感じでやっぺいこうという構想が最初にあったようです。

そして、これは早川正一先生のお作りになった、年表です(表2)。ここに示されたとおり、初期の人類学研究所は、たくさんの神言会の神父の方々が中心になっていたということです。

沼澤先生は神話学や宗教研究、中山先生は考古学というか、どちらかという人骨の研究をされていた方です。さらに、1952年から、旧石器をやっていたマリンガー神父が赴任し、10年後にドイツに戻ります。1960年から1965年まで、先ほど出ましたマルティン・グジンデ神父、1960年にはドミニク・シュレーダー神父、シュレーダー神父は、人喰いやカニバリズムの講義を人類学科でやっていたと聞いています。

さらに、1961年からハインリッヒ・アウフェンアンガー神父が所員になり、パプアニューギニアの調査などをされ、その資料は今、人類学博物館に収蔵されています。日本人がおこなった最も早いパプアニューギニアの調査だと思えます。素晴らしい資料が残されています。それから、1968年ごろ、これはクネヒト先生がおっしゃったエーデル神父が『Asian Folklore Studies』を携えて移動してこられたということです。

昨年、私は、オーストリアのグラーツで開かれたヨーロッパ考古天文学会に出たときにウィーンに寄ったのですが、かつての「民俗学博物館」が、今は「世界文化博物館(Weltkultur Museum in Wien)」と名前を変えて、リニューアルされました。ドイツ語圏の博物館は「エスノロジー」という言葉をほとんどやめて、「世界文化博物館」と言っています。

実はここで、1つの部屋を全部使って神言会というか独逸学派の展示がおこなわれています。例えばシュミットの展示、説明がいろいろあります。しかしこれは文化圏学派を称えるわけでもなく、学史の中で批判も含めて捉えようという展示です。ですので、いろいろ批判的なことも書いてあって、シュミットのところでは、「Wertfreie Wissenschaft?」、いわゆる価値に中立な学問というのはあり得るのかどうか、とくに人文科学・社会科学の場合、価値観から独立した研究ができるのかどうかという、ウェーバー以来の大きな問いを掛けるような説明がドイツ語と英語でされています。

その中に、実はグジンデ神父の展示コーナーもありました。それ以外にも、コッパースやシェベスタ、そういう人たちの写真と業績が展示されています。ぜひご覧ください。

グジンデ神父収集の、フエゴ島先住民の民族資料の実物も展示されています。左上は、魚を突く銚先です(写真1)。実は個人的なことを申しますと、私が東大の考古学研究室の卒業論文で書いたのが新大陸の銚です。それで、American Museum of Natural History(アメリカ自然史博物館)で、オーティス・メイソンという方が出しているアメリカ大陸の銚頭に関するモノグラフがあって、その中で南米のフエゴ島インディアンの銚の絵を見たりもしたのですが、どうもそのモデルがグジンデ神父の集めた、この資料のようです。図でしか見たことがなかったものの実物が見られたということで、モノをやっている人間としては、とても感動しました。



写真1



写真2

下は、フエゴ島インディアンの人が使っていた樹皮、木の皮を張ったカヌーです(写真2)。私は、その後にカヌーの研究をしているので、これは模型ですが、大変感動しました。それ以外にもさまざまな民族資料が展示されています。

最近、日本語で、グジンデ神父が研究したものを中心にして書かれた本があります。左側の写真は、先ほど山田先生が見せたと思いますが、たくさんの写真が載っています(写真3)。

ところで、私が研究所長になったときに、研究所長室に古いスライドやネガがありました。それを今、デジタル化しているのですが、8ミリ資料もありました。グジンデ神父が撮った写真もあります。『Die Feuer Lands(燃える土地)』という、こんな分厚いドイツ語の本に掲載された写真の原板みたいな写真がありました。先ほど山田先生が、写真集が出たと言われましたが、その写真集に使った写真は人類研の所長室にある写真のコピーのようなものなのか、それとも

グジンデが帰国するときにもち帰った残りの分が、ちょっと分からないのですが、ぜひ確認してみたいと思います。

これはマリンガー神父がもってきた旧石器のコレクションで、今は人類学博物館にあります。これはアフリカや日本の旧石器なのですが、とても貴重な資料です(写真4)。博物館で図録を出したら売り切れて、再版しました。というのは、例えば国内の博物館などに、ヨーロッパ、アフリカなどの旧石器の資料がありますが、ほとんどがレプリカです。しかし、これは本物です。ヨーロッパやアフリカの本物の旧石器があるというのは、本当に今では考えられません。日本の資料と一部交換したと聞いております。このようなどても貴重なものが人類学研究所および人類学博物館には残っています。

もう一度この年表(表2)に戻ります。その後、小林知生先生さんや浅井恵倫先生あたりの方々が途中から加わって、ニューギニアの調査をしています。沼澤喜市先生も行かれています。アウフェンアンガーさんが中心になってニューギニアの研究なんかもおこなわれていたということです。ただし、1973年あたりで、今まで研究所を引

張ってきた神父の方々がことごとく帰国されたり亡くなられたりして、急激にメンバーが変わっていった時期があります。それが年表で、一目で分かると思います。

1973年にヨハネス・ヒルシュマイヤーさんが学長になりました。この先生はハーバード大学の経営学の先生だったらしく、早川正一先生に言わせると、どちらかという目が経営学のほうに向いていて、あまり人類学や外国語学、文学、そちらのほうは、やや手薄になっていったという傾向もあったことをお聞きしました。



写真3



写真4

さらに考古学の大家達朗先生からのメモを要約しますと、中山先生は1949年に赴任すると、渥美町(現田原市)の保美貝塚、伊川津貝塚、吉胡貝塚という重要な貝塚を相次いで調査したということです。これらは東海を代表する縄文末期の重要な貝塚です。大塚先生によると、戦前に考古学は「大東亜共栄圏」を拡大するという、考古学が軍隊に守られて、どんどん朝鮮半島を発掘したりした、つまり、日本の侵略のお先棒を担いようなどころがあるのですが、その戦前の反省から、科学的な考古学が志向され、その国営発掘の第1号が吉胡貝塚であったということです。そこでは、縄文土器の研究の大家である山内清男先生に加えて、お墓と人骨を中山先生が担当されたということです。

その資料は一部、人類学博物館に収蔵されています。この吉胡貝塚の発掘は、皆さんもよく知っている弥生時代の発掘の登呂遺跡に匹敵するような、戦後の日本考古学の最も重要な発掘の一つです。それに人類学研究所が関係していたということです。

この間、『人類学研究所紀要』というものも6年ほど出されて、1号から8号まで出されています。私はこの前、ざっと読んだのですが、半分ぐらいは考古学の論文です。つまり、1970年代の中ごろまでは人類学研究所の活動というのは、いわゆる民族学にプラスして、考古学や人骨研究が大きなウエートを占めていたわけです。このような構成というのは、いわゆる形質人類学、民族学、考古学、さらに言語学という、アメリカの人類学の構造といえます。私もアメリカで人類学を学んで、Ph.D.を取ったのでアメリカの人類学時代の教育を思い出しました。

後でクネヒト先生あたりにお聞きしたいのですが、こういう構成にシュミットはあまり満足していなかったということ、あるところで読んだことがあります。アメリカ流の総合人類学というのは、あまりお好みではなかったということ、ちらっと聞いたことがあります。

このような、学長が替わり、さらに神言会の神父の方々がことごとくいなくなるという流れがありました。1949年にできて30周年の1979年に、大きな改革があったということです。

このころ活躍されたのは、小林知生先生、山田隆治先生等が中心になっていきました。この間、おこなわれたのが、いわゆる共同研究でして、それが何冊かの本として刊行されています。この時期の特徴は、もともとかなり総合的な人類学を志向していた人類学研究所が、第2期に至って、どちらかというとアジアを中心にした宗教人類学に特化していったという傾向が見られると思います。外部・内部の先生が中心になって、3年ぐら이의共同研究をどんどんおこなっていったということです。その成果は本になって出ております。

白鳥芳郎先生、南山大学の山田隆治先生、倉田勇先生、それから、国立民族学博物館におられました杉本良男先生が一時ここにおられて、第一種研究所員として活躍されました。短期間ですが、慶應義塾大学に抜けられた吉原和男先生、それから、クネヒト先生、さらには宮沢

千尋先生が中心となって共同研究がずっとおこなわれていきました。

その成果は、このような本になっています(写真5)。山田先生の紹介にあった『母権』や『W・シュミット記念論文集』、『アフリカの矮小民族』といった本です。右側にあるのが、先ほど言いました、短期間ありました『人類学研究所紀要』です。



写真5

あと、一時期、名古屋大学から小谷凱宣先生がいらっしゃって、アイヌの研究をだいぶ盛んにされて、報告書を出しています。この報告書はすごくニーズがあって、今、確か人類研ではもう在庫がない、なかなか貴重な本になっております。

言い忘れましたが、人類学研究所の最初、第1期で何をを目指していたのかということです。

一つは、人類の進化史、人類史みたいなものです。もう一つは、やはり大きいのは、日本人の起源だったようです。日本人の起源に関連して、アイヌ民族の研究にもとても関心がありました。人骨なんかを盛んに集めたというのも、そういう流れであったということです。

大体、日本の考古学の歴史をひもときますと、多くの海外の研究者が最初は明治時代に、モースなどが来て、その指導のもとに始まったのです。そういう人たちの関心というのは、まず日本人の起源なのですね。そういった関係で、アイヌ民族と日本人はどう関係するのか、さて縄文人はどうだという議論が多かったのです。つまり最初は、日本人の起源を人類史の中で位置付けるような関心が強かったように思います。

第2期は、どちらかというとな宗教人類学、社会人類学、とくにアジアの宗教人類学みたいなものを希求していったということです。

当時の研究所の目的を見ますと、「主としてアジア諸地域の基層的、伝統的な民族文化を研究対象とし、宗教民族学その他の諸問題ないしは、一定地域社会に関する比較的短期間の歴史人類学的な特定研究を実施」ということが書かれています。

これで一定の成果を上げたわけですが、私が所長になってから、ここを改訂いたしました。第3期の話に入っていきます。

実際に私が所長を引き受けて、第二種研究所員で助けていただいた先生方の中にはアフリ

カの専門家もいますし、新大陸の専門家もいますから、「アジア」というのは、ちょっとやりづら
いだろうと。しかし、日本という国に研究所がつくられた理由は、やはりアジアの研究をしたい
という基本線はあるということで、両方を兼ね備えるような目的にするために、「アジアを中核
として、その比較として世界諸地域の諸民族の文化を研究対象とする人類学的研究」としまし
た。そして、現代的な問題をいくつか入れてというように、研究所の目的を改訂しました。

私が所長を引き受ける2010年より前に、一時期、研究所の活動が停滞した時期がありま
す。その原因に関しては、今日はいちいち詮索はいたしません。

いくつかあると思います。例えば、南山大学で人類学が始まったときには、まだ人類学は日
本で新しい学問、珍しい学問で、東京大学、東京都立大学（一時期首都大学東京）、南山大学
が3大老舗で、貴重だったわけです。ところが、次第に、例えば国立民族学博物館ができて、大
きな中心的な組織ができていきます。さらに、メジャーな大学に文化人類学の先生が職を得
て、文化人類学の講座等ができていきます。いくつか研究拠点ができたわけです。

ただし、例えば京都大学にも文化人類学者はたくさんおられますが、いろいろなところに分
散しています。南山大学のように1つの学科に7～8人、考古学を入れると10人ぐらいの教員
が集まっているところは、日本ではなかなかありません。これは南山大学の強みでもあります。
しかし、それが、活動が一時停滞した一つの原因にもなっているというところがあります。

簡単に言いますと、それは、条件が良過ぎる、南山大学は揃い過ぎているのではないかと
いうことです。つまり、南山大学の中だけで学生の教育は完結してしまうほどの豊富なスタッフ
がいるものですから、あまり外に出ていこうとしなかったということです。

一つだけ、思い出を言います。私が2007年に南山大学に来たばかりのときに人類文化学科
で会議があって、人類学研究所はもう閉鎖するというのに合意が出されました。私は来てす
ぐに「あれ、研究所はなくなってしまうんだ」と思って、全然関わらなかったわけです。

ある時、最初のころに受けもった研究指導で喋っていた時に、「私は研究会に行くので、来週
の研究指導を休みたい」と言ったのです。そうしたら、その学生が何と言ったかという、「補講
はどうするんですか」と言うのです。1対1の研究指導です。

今は文科省から指導があって、休講したらちゃんと補講をするというのは分かっています。
ですが、これは私のようなオールド・ボーイのノスタルジーなのですが、大体、学問というのは、
どんどん他の大学のゼミに潜り込んで聞いてみたり、考古学の学生だったら、発掘に行くため
にゼミに来なかつたりということがよくありました。私もそうやってきた人間なのですが、たぶ
んその学生は、南山大学の中だけで自己完結していたのでしょう。実はその研究会というの
は、その学生がやるテーマに直結した研究会だったのです。私は、その学生が「ああ、先生、私

も付いていいですか!」みたいなことを言うと思っていたら、期待がはずれました。例えば、その後、私は2012年から中部地区の人類学の集まりである中部人類学談話会の会長も引き受けていたのですが、そういう会合にあまり学生が出てきません。教員もあまり出てきません。そのように、地域の中でも大学を越えて活動するという機運が少し足りないのではないかと思います。それは、逆に言うと、南山大学が恵まれ過ぎていたからだとは考えています。

一言で言うと、私というか、人類学を最初にやった人間ではなくて、たとえば出身は考古学で、日本の考古学をやっていくうちにちょっと飽き足らなくなって、日本ではできなかったのでアメリカに留学したという方が多いです。もともと経済学だった、あるいは教育学だった、地理学だったけれども、文化人類学のほうに自分から殻を破って乗り出して行く、苦勞していろいろなところを渡り歩いたりする人が多いのです。南山大学の場合、条件が良過ぎて、ここで勉強すれば十分というような感じだったのかなど。人類学研究所がなぜ停滞したかという理由の一つですが、私の前の所長の渡邊学先生の分析ですが、あまり周りの人が協力しなかったのではないかということが書かれています。何でそうなったのかなど。私はそのころは体験していないので分からないのですが、研究者一人一人が小さくまとまってしまうというか、そういう傾向があったのではないかと思います。南山大学の条件が良いがためにそのような傾向になってしまうのではないかと感じたという次第です。

私が2010年に所長を拝命したときに、ある意味では、グラウンド・ゼロからのスタートでした。何もなかったので、何をやってもいい。ですから、はっきり言って、とてもやりやすかったです。何をやっても良かったのです。

難しくはありませんでした。やることは決まっているじゃないですか。人文系の研究所だったら、やることというのは講演会や研究会をおこない、紀要などを出すことです。別にそんなに難しいことはありませんでした。

たとえば査読付き学術誌として、今や東海地区の貴重な人類学系の学術雑誌に『年報人類学研究』を開始しました。それから、共同研究の再開、その成果として『論集人類学研究』の発行をおこないました。公開研究会、シンポジウム、研究会等を積極的におこないました。「人類学フェスティバル」のような社会アウトリーチも始めました。それから、これは私の個人的なことなのですが、中部人類学談話会との連携です。私は2012年から2018年まで会長を務めておりまして、談話会の研究会をかなり積極的に、人類学研究所と共催をしてきたと思います。ですから、別に普通のことをやっただけの話だと思っています。

ポリシーとしましては、目指すべきものと考えたものが4つぐらいあります。

1つ目は、再スタートのキックオフとして、川田順三先生をお招きした講演会をおこないまし

た。そのタイトルは「新しいヒトの学を目指して」でした。人類を研究する研究所なので、人類というものを総合的に考える視点を、もう一度回復したいということです。これは第1期に目指したものに、やや近いような気はします。2つ目は、今、社会が直面している問題を扱わなければいけないだろうということです。それは、宗教対立など、いろいろとあります。2011年に東日本大震災が起きて、たまたま私は地元の民俗学者の気仙沼におられた川島秀一先生、福島岩崎真幸先生と知人だったので、震災の3カ月後に、震災を体験され、被害も受けられているお二人をお呼びして、人類学談話会で震災に関係した研究会をおこないました。その流れで、人類学研究所でもたびたび川島先生や岩崎先生をお呼びして、何度か研究会もやってきました。それが今、発展して、震災から危機やリスクの人類学の共同研究のようなものがずっと、数年間続いてきております。

右側の写真が川島先生です(写真6)。震災があつてすぐ2カ月後ぐらいに、私が個人的に訪ねたときです。

さらに、例えば「フタバから遠く離れて」という、原発の影響で双葉町から移住を余儀なくされた方々の映画の上映会などもおこないました。ちょうど地元でNGOをやっていて、いろいろ被害を受けた知人の方もお呼びして、ディスカッションもおこなったということです。



写真6

これに関連して、現在進行中ですが、国際化推進事業というものをおこないました。国際化推進事業というのは、南山大学の中で応募する基金があるのですが、3年継続でなにかしらかのお金がもらえる、安いのですが、一人ぐらい研究員の方を雇えるぐらいのお金がもらえる基金があつて、それに応募しました。

まず、テーマが「アジア人類学者ネットワーク」というものです。やはりアジアを基軸にして、アジアの人類学者がネットワークをつくりたいというものです。テーマとしては「災害」です。フィリピンやインドネシア、インドで同じような災害、津波や地震や台風や火山など、日本と同じような災害が起きていると。そういうときに人類学者がどのような役割を果たすべきか、ノウハウや体験をアジアの中で共有しようという趣旨でおこないました。

それが今も続いていて、今、第2期、2年目です。第1期は、先ほど言いました川島先生のような人を名古屋に呼んでシンポジウムをおこない、また、インドとインドネシアとフィリピンから

研究者をお呼びして、南山大学で国際シンポジウムをおこないました。第2期は、どこか別の国でシンポジウムをおこなうということで、今年の9月にフィリピンで、同じようなメンバーで、インドネシア、フィリピン、インド、そして日本で、日本からも何人か研究者が参加して、震災などを対象に危機に関するアジア人類学者のネットワークを維持するためのシンポジウムをおこなってきました。

そのときの写真です。左は、フィリピンのマニラの大学で会合をやっているところです(写真7)。右は、エクスカッションでピナツボ火山の見学におこなったときのものです(写真8)。ピナツボ火山の被災地は今、行くところを案内してもらえます。行くと言っても、水の中を歩いていくのではなくて、ジープで河原を走って行かなければならないのですが、アエタの方などが案内してくれます。そういう人たちをみんなで訪ねてみるということをしてきました。

つまり、研究所の国際化推進事業と絡めて、震災や危機の人類学のプロジェクトが進行中であるということです。これも一つ、私が立てた方針の関連です。

それと関連するのですが、やはり人類学というのは、国際的な刺激を常に受ける必要があるということで、海外の著名な研究者の講演を何回かおこなってきました。これは、神奈川大学がフランスの技術人類学の大家、フランソワ・シゴー先生をお呼びしたときに、謝礼金と名



写真7



写真8

古屋往復の旅費をこちらが出して、南山大学にもお呼びして、講演いただいたときの写真です(写真9)。

その後、ティム・インゴルド先生を東大が呼んだときに、やはり東京と名古屋の旅費、謝礼金を出して、講演をおこなったことがあります。さらに、写真はありませんが、フランスの有名なピエール・ルモニエ先生を京都大学が呼んだときに、やはり京都・名古屋往復の旅費をこちらが出して、講演をおこないました。

東大や京大のような大きなところが渡航費用を出して、有名人を呼んでくれるわけです。そこを旅費と南山大学での講演料だけお支払いすることで名古屋に来てもらう形で相乗りさせ

ていただいたのです。個人的に、せっかく誰々さんが日本に来るので名古屋にも呼んでくれないかと、お願いが来たのは幸運でした。そのおかげで、大変有名な研究者と接することができて、幸いだったと思います。

さらに考えたのは、もともと『Asian Folklore Studies』も含めまして、日本の研究、いわゆる日本の民俗学の研究も一つ視野に入っていたはずだということです。

たまたま、私の個人的なコネクションなのですが、神奈川大学と國學院大學と成城大学、さらに愛知大学のほうで民族学の研究所が集まった連合研究会をおこなっていました。ある時、愛知大学の研究会に呼ばれた時に、次は南山大学でやってくれということで南山大学も加わって、5大学研究所連合というのをつくりました。いわゆる民俗学、フォークロア系の研究会をやりました。

このときは、研究所に民俗学や地理学、民芸研究を専門にしている濱田琢司先生がいらっしゃったので、濱田先生と相談して、こういうことを実現させました。この後、ちょっと絶えているのですが、この前も関係者とお会いしたときに、「またやりたいね」「南山大学も加わってね」という話になっていたので、「はい、ぜひ」というお話しをしました。

それから、もう一つは、学際的な研究で、いわゆるピュアサイエンスと人類学がガチでぶつかってみようということで、「天文学と人類学の融合」という研究会を過去3年間、やってきております。たまたま私は国立天文台の天文学者に知人が多かったこともあって実現しました。本当は国立天文台でやることになっていましたが、予算がうまく取れなかったようです。天文台も頭が固くて、何で人類学や民族学と天文学が一緒にやるのかということで、企画が潰れたということも聞いたので、「じゃあ、人類研でやるから」ということで引き受けて、過去3回やりました。1回休んだのですが、今年も3月に人類研で国際シンポジウム、中国やニュージーランドやインドのほうから天文学者を呼んで、大きな曆に関するシンポジウム、第4回目の「天文学と人類学の融合」をおこなう予定です。

それと関連して、社会アウトリーチとして、私が個人的にやっている「星空人類学」というものもおこないました。「人類学フェスティバル」という、人類学を楽しく、敷居を低くして、一般の方



写真9

に伝えていこうという試みを人類学研究所が主催するもので、過去何年間か開催しています。

最初は2009年におこないました。これは、どこからのサポートもなく、私が個人的にやりました。一時は絶えていたのですが、私が所長になってから、人類学研究所が主催して「人類学フェスティバル」をやっていこうと、一般の方に人類学の面白さを伝える企画をやろうということで、今年もやりました。

これは、先ほど言いました「天文学と人類学の融合」の、いわば社会還元版です。より一般の方に楽しさを分かってもらうことを目的としています。民族学や考古学の展示と、プラネタリウムによる解説を融合させたイベントです。

最後に、人類学研究所が目指すべきもの、さまざまなことを今後も継続して行ってほしいと思うのですが、やはり「人類」を研究する場であろうということです。それに、こういう研究所というのは、なかなか日本でも貴重です。さらに、現在、「アンソロポシーン」つまり、「人新世」という概念が出てきましたし、一部の社会では、民族分断、宗教分断、ヘイトスピーチ等がすごく多くなってきました。こういう時代であるからこそ、あらためて「人類」というのは何なのかということを考える必要が、むしろ生じてきたのではないかと思います。

そのために、「人類学研究所」なので、やはり「人類」を研究する研究所として活動していくべきだろうということです。4つ目のポリシーとして、積極的にそういう研究会もやってきました。

その一つとして、国立科学博物館が進めています「3万年前の航海」というのが、この前、成功して、NHKでも映されましたが、その走りになる、「琉球列島最古の航海者を探る」という大きなシンポジウムを人類研主催で開催しました。これは、今年の7月に実証航海が成功して、丸木舟が台湾から与那国島に到着したときの写真です(写真10)。

来週、私は、このことと関係したシンポジウムで船の話をするために台湾の台南に行かなければならないのですが、人類学研究所はこのような、やはり「人類」のマクロな研究をする研究所としてあるべきではないかと思います。

最後になりますが、人類学研究所の所員、私も含めて何人かの人間が関わっている「出ユーラシアの統合的人類史学」というものが、今年から5年間、「新学術領域」という大きな科研を獲得することができました。本部は岡山大学に置かれているのですが、協力する機関として、東大の総合研究博物館をはじめとして、人類学研究所もこれを形成する一翼を担っておりますので、こういう大きなプロジェクトの拠点の一つとして、研究所がこれからプレゼンスを高めていく必要があるだろうと、また、これはもう始まっていますから、可能であると思います。

今日はスライドを作ってきませんでしたが、同時に2019年に理化学研究所で「文明的人間

の起源、新ホモ・サピエンス学」という、別の新しいプロジェクトがスタートしまして、私も加わっています。これは、理化学研究所が遺伝学や考古学、さまざまなデータをスーパーコンピューターに入れて人類の進化の過程の解析



写真10

をしようという大プロジェクトです。その中で、神話の要素も入れるということで、実は山田先生にも入ってもらって神話の研究グループを立ち上げたところです。

最初の研究会は、7月に1泊2日の日程を立て南山大学でおこないました。この前の10月には東北大学で山田先生にお世話になって開催してきたのですが、そういうものの一翼を担っていくことも可能性を広げると思います。というのは、もともと人類学研究所は、シュミットの世界的な人類史を希求して、あるいは沼澤喜市先生が日本神話を世界の神話から位置づけた、そのような方々がオリジンにいたわけです。先ほどの山田先生のお話でもあったような、狩猟採集民でも古い段階と、牧畜民に繋がっていくような新しい段階の神話に分かれるのではないかという展望、そのような人類史の大きな、マクロな新しい仮説が出されてきていますので、そういうものも研究する一つの場として、今後研究所が存在感を示していく必要もあるし、それは可能であろうと考えております。

私はこういう研究所であればいいなと思って、今後も協力していきたいと思います。ありがとうございました。

参考文献

後藤 明

2010 「60周年記念第2回シンポジウム「人類学研究所の原点と将来像」報告」『人類学研究所通信』17/18: 36-51。

南山学園

2011 『南山大学の人類学』南山学園史料集6。

渡邊 学

2007 「人類学研究所の活動の見直しと将来構想の策定に向けて」人類学改組検討委員会資料。

2008 「人類学研究所の歴史と評価」『アルケイア——記録・情報・歴史』2: 63-99。

渡邊 学(編)

2010a 「人類学研究所改組検討委員会報告書(抜粋)」『人類学研究所通信』17/18: 11-20。

2010b 「人類学研究所小史」『人類学研究所通信』17/18: 2-7。

コメント



伊藤 亜人
(東京大学・名誉教授)

伊藤と申します。今日はこのような、3人の発表全体について、しかも、南山大学の今後の人類学のあり方や人類学研究所のあり方まで含めて私がコメントするというのは大役で、一体どういう形でできるかと、随分前から悩みながら、ここに至りました。

おそらく、最初にお話をされたクネヒトさんと私はもう学生のときから友人であるということが、コメンテーターに選ばれた一つの理由だったと思います。もう一つは、ドイツ語圏における、いわゆるドイツ・オーストリア的な歴史民族学というか、エスノロジーの教育・研究が、我々の前世代において盛んにおこなわれてきましたが、私とその影響を受けた最後の世代であるということも理由かと思えます。そういう数少ない人の中から私がコメンテーターに選ばれたのだらうと思えます。

しかし、私が本日もっとも力を入れたいと思って新幹線の中でも考えてきたのは、やはり今日の日本において、人類学の使命というか、人類学研究所あるいは、その教育のあり方です。まさにこれは新しい、クネヒトさんの言葉を借りれば、逆のミSSIONナリー、人類学的なミSSIONナリーというものが求められているのではないかと思います。そういう意味では、大学教育・研究において、新たにその展望を探るといことは、この大学だけでなく、日本全国で、あるいは学会を挙げて求められていることだと思います。そういうことを申し上げようと思えます。

ドイツ・オーストリア的な民族学について、私の学生のときはまだドイツ語で授業をやる、ドイツ語のテキストを使った授業がいくつかありました。大林太良先生の授業もそうでした。そのときに読んだ本は、シベリアの少数民族、狩猟採集民の世界観に関するドイツ語の文献でした。それから宗教学の小口偉一先生の授業もそうでしたね。ただどういわけか、本郷の文学部宗教学の教室で授業をしていました。小口先生は駒場のキャンパスまで来るのが煩わしくて、私たちに本郷まで来いというものですから、文学部の厳粛な雰囲気の中で、やはりドイツ語のテキストを使った授業を受けた覚えがあります。

しかし、それ以後は、ついにドイツ語はどんどん錆びる一方でした。先ほどからドイツ・オーストリア的な学問のシュミットやコッパース、グレープナー、グジンデといった名前が出てきました。私自身は、大林先生の指導学生として大きな影響を受けましたし、その後もエスノロジーには誰よりも関心を持ち続けてきました。

今日は久しぶりに、そういう古い研究者の名前を聞いて、それから、フランクフルト学派のレオ・フロベニウスやイェンゼンなんていう名前も出てきましたが、やはり大林先生を通して、私も何となく魅かれた時代があったことを覚えております。

その時に受けた教育が、その後、自分の人類学の研究にどこまで生かされたのか、振り返ることがあります。時には、やはりこれには意味があったなとポジティブに考えています。例えば、

神言会の神父たちが、原始一神教という至高神の信仰について、世界布教の基礎となりうると考えていたことを、授業や概説書によって知ってはいましたが、自分でも民族誌のなかでそれに接したことがありました。東南アジアの、例えば、ホワイト(W.G.White)が東南アジア・アンダマン海の漂泊漁民・船上生活漁民について、Sea Gypsyとして報告した中でも、彼らの信仰世界における「創造主」や「神聖」という観念に多大な関心を払っていたと思います。また、ドロース神父らの旅行記やら当時の民族学の報告でも、雲南山地の少数民族について至高神に通じる観念に触れていたように記憶します。

そういうことがどこかに埋め込まれていたのか、その後、中国の世界観における「天」という概念の背後に、やはり大陸に広くそうした至高神的な観念があって、それが洗練化され体系化され、倫理性をもち、世界を統治する帝国の体制とも結び付いて、あのように体系化されたのかなと思っているうちに、今度は韓国研究をやるようになりました。韓国在来の概念では神のことを「ハナム」や「ハヌム」と言います。ハナムもハヌムも「大きな」「天上の」「唯一の」「偉大な」という意味を併せもつ概念で、漢語で表現すれば「天」となります。これをキリスト教の宣教師たちは、朝鮮におけるキリスト教布教の基本として、戦略的に用いてきたわけです。つまり、「ハナム」という言葉とキリスト教における「神」という概念を結びつけてきたのです。

朝鮮における神話をはじめ、現代の民間信仰の中でも、やはり「ハナム」というのは主体がはっきりしているようで、おぼろげですが、それでいて国歌の中でも謳われています。しかし、文献神話には「天帝」と漢字表記され、中華の「天」と区別がつきません。一方キリスト教の側では「God」という概念を結びつけたこととなります。しかし、その混沌とした、綱引きのような中で、やはり東アジアの古いところにごうした至高神に通じる信仰があったのではないかと考えたりします。では、日本の民俗信仰の中に、これに対応するものがあるのだろうかということも考えてみますが、どうも、いつまでたっても、それが見えないというのが現実です。

このように、自分の思索においてアジア、日本を広く考える上で、シュミット以来の文化圏という構想などは、自分の思考にとって全く無駄であったとは思えません。

それから、つい最近も、韓国済州島の友人たちが写真集の出版を準備しているのですが、1969年に私が撮った写真を集めてみると、石の写真をたくさん撮っていました。石の名についてもいろいろたずねていました。丸い石、地面から飛び出した石など、あるいは石にまつわる話を聞いていました。

なぜこんなに石の写真を撮ったのかと韓国から質問が来ましたが、それはその当時、「アロール島における石の利用」というオランダ人の民族学の論文を読んだからでした。それから、同様に独逸的な民族学の延長上で、当時日本でも関心と呼んだものに巨石文化に関する民

族学的研究がありました。巨石Megalithに関する関心がどこかに刻み込まれていたようで、それで私もしきりに石の写真を撮ったり、石にまつわる話に惹かれたようです。済州島は「済州三多」といって石が多いことで知られていましたが、私ほど石の写真を撮った人はなかったかもしれません。

そのように、自分にとって独逸流の民族学は、無駄でも過去の産物でもなく、大きな世界観や世界規模の歴史的パースペクティブは、やはり人類学の研究にとって必要だと思います。

クネヒトさんの話を聞いていて非常に感銘を受けた点は、何ととっても、まさにミッシヨナリーの問題です。ミッシヨナリーという、キリスト教の宣教という世界規模の戦略の中心から派遣され、置かれた拠点。そして、そこに求められていたものと、そこに赴任してきた人たちが出会った経験。そして、そこで観察して気付いた、現地の人々の宗教心や信仰の世界というもの。その間のジレンマといいますか、コントラディクションとまでは言わなくても、ジレンマがどういうことになったのかという問題です。

南山大学は今なお、キリスト世界の中においても重要な位置づけをされた大学で、布教の歴史を背景に民族学の研究拠点となり、そこで民族学を通して、名称も変わり、人類学研究所ができ、学科ができてきた。この歴史を生かしながら、どのようにこの拠点をこれから発展させていくかということが課題となるかと思います。ですから、シュミット神父からエーデル師、クネヒトさんたちの葛藤やジレンマといいますか、感じ取った新たなパースペクティブを何らかの形で生かすべきだろうと思います。

「ミッシヨナリー」という言葉を逆手に使うなら、キリスト教世界の周辺部にあって、民俗文化に根ざした精神的な感性といいますか、必ずしも一神教のように体系化された世界観ではなくても、身の周りの物に込める思いや気持ちのような精神性。あるいは生活像を支える様式性ですね。様式を共有することの精神的な側面、あるいは、信仰や感性と結びついた儀礼、そういったものに着目する人類学的な宗教研究、宗教人類学的な研究に南山大学は力を入れてほしいと思います。

これが、歴史を生かした南山大学らしい一つの拠点であると思います。しかも日本発信の、シュミット師から始まりエーデル師、クネヒトさんを通して、3世代、4世代にわたる世界規模の経験をこの拠点においてどのように生かすかということを考えると、この大学における人類学の研究あるいは教育にとって重要なパースペクティブになるのではないかと思います。

それから、後藤さんは、もともと考古学でありエスノロジーであり、神話学や宗教、信仰にも関心を持ち、非常に幅が広くて、大林先生との関わりも深く、私が以前から仲間意識をもって、ずっと尊敬してきた方なのですが、やはり後藤さんが中心となった考古学や物質文化、あ

るいは技術や歴史も、この研究所の、南山大学の大きな特色だろうと思います。その点は、現在もこの研究所では力を入れており、順調に発展しているように思われます。それは今後も何とか生かし続けてほしいと思います。現にこの研究所および学科において力を入れ、それが順調に発展しているように思われます。

人類学の使命や今後の展望については、もともと人類学に求められたものが何だったのかと考えれば、大航海時代以来の世界大的な交流の中で、あるいは、非常にグローバルな一体性を一方で追求する中で生じてきた、さまざまな他者に対する関心、また、マイノリティー、異文化に対する関心というものがありました。

そういった社会的な要請は、今も昔も全く変わっていないと思います。コンテキストが違うだけであって、近代化の名のもと、国家レベルの社会統合が強調される中で、宗教や思想、教育、経済システム、情報システム、あるいは軍事システムまで推進されてきました。しかし、社会のシステムシーを追及する中で、新たに周縁化された人々をめぐる社会問題も顕在化しています。経済システムにおいて非生産的とみなされる高齢者や非公式セクターとみなされる弱者など、新たなマイノリティーをめぐる問題は、日本だけでなく世界的な課題となって浮上していると思います。これを福祉の問題とすり替えられることも多いのですが、基本的に見てシステムがはらむマイノリティーであり、あるいは、社会統合にともなう負の遺産でもあるわけです。こういった問題に目を向けるのは、やはり人類学であります。

とはいつても、国家統合あるいは経済の合理性というものが高調される、あるいは効率がシステムティックに追求される体制の中で、あらゆる分野のエリートは皆、システムで世の中を捉えようとするわけです。その中で見逃され、あるいは軽視される人たちは、システムにおいて周縁に位置づけられます。こういう問題は、かつて人類学に期待された状況とはまた別の意味で、現在もなお、あるいは、ますます大きな問題として我々に突き付けられているように思います。南山大学においても、こういった問題にも少し目を向けるようなプロジェクトやセミナーをもたれると、広く学生たちの関心を集められるのではないかと思います。

要するに産業化や情報化、あるいはAI化というものが進む中で、例えば今、AI化の体制づくりの中で、日本の総務省が中心となって、情報学系の教授なんかも長になって、AI時代における人間の問題をどう扱うか、あるいは、倫理性をどのように確立するかという諮問委員会や研究会が設置されています。しかし、その概要が紹介されているのを見ると、二言目には「人間的」という言葉によって八つの項目が挙げられたりしていますが、そのどれをみても、リアリティーのある人間像に根ざした議論はないのです。これも、人類学に求められる大きな課題だと思っています。

言葉だけで「人間的」や「人間性」、「倫理性」うんぬんと言われますが、職場をはじめとして、我々が現地で観察・記述できるレベルで、よりリアルな人間の置かれた状況を取り上げるという事は、今、非常に重要な課題だと思います。それはこの大学だけではなくて、日本の学会全体の問題でもあるのですが、なかなかこれに対して十分な対応が図られているとは思えません。

高齢化や過疎化の問題は、今やもう国民レベルの課題として、誰もが関心をもっています。あるいは、移住労働者をめぐる課題もまさに現在進行中で、これがどの方向に展開するか。展望もなかなか見えにくい問題をはらんでいると思います。人類学の中では、各地で目撃し、現実にもそういう問題にコミットしている研究者も多いのですが、これを一つの新しいミッションナリーのような形で、明確な一つの、方向を見据えて発信をすべきではなからうかと思えます。

私が現地調査をおこなってきた韓国の農村では、もう50年近く観察しているのですが、農村に嫁いでくる外国人女性ばかりでなく、近年はベトナム人やスリランカ人など外国人労働者があらゆる分野に入ってきています。彼らは今では電話一本で、明日は何時からどんな作業だと言うと、パッと人が車で送られてきて、つい2、3年前まで地域の女性がこなしていた仕事をみんな、ウズベキスタン人やロシア人、あるいはベトナム人がこなしているのです。たった数年の間に起きたことです。漁村のほうに行くと、地元の若者、あるいは韓国人は全般にそうしたきつい労働を忌避しがちですが、そこにベトナム人、スリランカ人、インドネシア人からロシア人までやってきて仕事をしています。

そうやって外国人がたくさん入ってきた村ではどういうことが起きるか。とくに、農家に嫁いできた女性たちが、いろいろ意識の差、あるいは、フィリピンの人ですと宗教的な問題もありますし、言語の問題だけではなく学歴の差もあります。むしろ、ベトナムから来た女性は学力が高いため、夫との間に対話が成り立ちません。年齢差もあります。子どもが生まれると、子どもは母親の言語を知らないですから、おばあさんと一緒になります。そうすると女性は、おばあさんに子どもを預けて、村から逃げ出そうとする、男性はそれを監視しようとする立場にもなります。

子どもの勉学を母親が見ることができないから、学力の差ができてきます。そうでなくても、韓国社会は学力の問題で、みんな、教育のために地方の村でも、韓国人の両親は子供たちを農村部の学校ではなく町の学校に送ろうとします。そうすると、地元の農村の学校は、フィリピンとベトナムの子どもたちばかりになっていくわけです。そして、母親とうまくいかずに、教育が不十分なまま大人になっていくため、いろいろな問題が今、社会問題になりつつあります。それ以外にも付随してさまざまな問題が起きています。

こういうことは、もう韓国全国で起きていることですが、日本でも他人事ではありません。日本はもう少し慎重に、しかし、外国人を受け入れようとしています。外国人を労働力として受け入れるだけでなく、新しい社会をどのように描くかというような大きな問題を、隣の韓国に、ちょっと学生たちを連れて研修旅行に行くだけで、もう目の当たりに見ることができるわけです。

中国でも同じような問題がたくさんあります。中国の場合は、また別の問題で、規制も厳しいところがありますが、日本から帰った研究者あるいは教授たち、学生もいて、交流も深めることができます。そういった現代的な課題を共有する教育・研究プロジェクトという形態も、ぜひ南山大学でもお考えになったらいかがでしょうか。私はそれを提案したいと思います。

そして、交流のパートナーとなってくれる人たちは、日本で研究して帰った人たちがいくらでもいます。そうした交流もぜひ、南山大学における人類学の教育・研究の発展の核に据えたなら、広く学生たちの関心に応えられるのではないかと思います。そういうことを申し上げたいと思って、参りました。以上です。

総合討論



【司会(宮脇)】最初に山田先生への質問です。19世紀ドイツ語圏の人類学(アントロポロジー)へのグスタフ・クレムの影響は、シュミットにもあったのかに関してです。19世紀ドイツのNaturvolk観の影響および名残はどこにあったのかということが、ひとつめの質問です。

もうひとつ、山田先生への質問を読み上げます。「ドイツ語圏に含めるのは問題かもしれませんが、オランダ構造主義学派の影響の有無がドイツ語圏全体でどう受容されていたのか、ご存じであれば教えてください。また、ドイツ人類学における個別性と普遍性の関心のあり方など、お考えがあればお話しください」とのことです。

では、まず山田先生から、この2点についてお答えいただけますでしょうか。

【山田】 ご質問ありがとうございます。どちらもかなり専門的なトピックで、私も詳しく知っているわけではないので恥ずかしいのですが、ひとつめのご質問は、19世紀ドイツのアントロポロジーにおけるグスタフ・クレムの影響ですね。グスタフ・クレムは、19世紀の半ばに、いち早く世界中の諸民族の資料をまとめて、その後の民族学的な研究の基礎をつくった人で、ある意味、バステアーンやヴァイツと似たような仕事をしたと言っていると思います。ですから、その影響というのは、直接シュミットがそれを継承しているということはないかもしれませんが、間接的には、そういった大きな流れの上に立ってシュミットも仕事をしていたとは言えると思います。

それから、「Naturvolk」という、19世紀に出てきた「自然民族」という考え方ですよね。「Kulturvolk(文化民族)」と分けるものは文字の有無というように大まかに考えてよいかもしれませんが、無文字の、自然に近い生活をしている人々と、より文化的な、文字をもった生活をしている人々との違いは、19世紀の初めぐらい、あるいは18世紀の終わりぐらいに、ヘルダーあたりが言い出しました。それはドイツの、広い意味での人類学研究の基礎になっていますので、やはりその流れの上でシュミットも研究していたということです。直接の影響関係までは言及できませんが、そうい



山田仁史氏

うことは言えると思います。

2番目のご質問は、オランダの構造主義のドイツにおける受容なのですが、このことについて私は全く分かりません。すみません。少なくとも、レヴィ=ストロースたちの構造主義よりももっと早く、それとは違う流れでライデン学派が存在したということが、彼らの仕事の英訳などによって広く知られるようになってきました。ドイツ語圏にも影響はあったのかもしれませんが、それはちょっと分かりません。

それから、個別性、普遍性というのは、何を意図されてのご質問なのか、やや分からなかったので、これからの残りの時間で似たような議論が出てくるかもしれませんが、それに残したいと思います。まずは、そんなところですよ。

*

【司会(宮脇)】 ありがとうございます。山田先生への質問はまだもう少しあるのですが、先にクネヒト先生への質問を紹介させていただこうと思います。

まず、ひとつめは、『An Anthropology without mission』に意味はあるのでしょうか。我々もミッションをもってアンソロポロジーをしているのではないのでしょうか。そういう意味では、ミッションナリーと変わらないのかもしれませんが。

ふたつめは、「戦後、南山大学の設立計画が具体化した時、岡正雄と石田英一郎を専任教員にしてほしいと嘆願が来たということですが、このことに関して何か資料が残っているのでしょうか」ということと、「北京にあった輔仁(Fu Jen)大学について、モンゴル史のワルター・ハイシッヒについてご存じのことはありますか」ということです。クネヒト先生、いかがでしょうか。

【クネヒト】 最初の質問ですが、『An Anthropology without mission』に意味はあるのでしょうか、というのは面白い質問だと思いますが、関心をひく問題は「mission」という概念の意味でしょう。

もしキリスト教の教えを宣伝する「宣教活動」という意味のミッションであれば、これには、はっきりした意図があるわけです。つまり、イエスの命令による派遣に従って、特定のメッセージ、つまり救いのメッセージを相手に伝える努めです。世俗的に言うなら、宗教的な教えを伝える「使命」です。

他方では、アンソロポロジーのmissionには、これに似ている面があります。どういうことかという、アンソロポロジーはヨーロッパの植民地観と深い関係がある学問だと考えています。つまり、ヨーロッパの諸国家が海外で植民地を獲得するにつれて、本国の大学で植民地の住民のあり方が議論されるようになりました。山田先生が言われたように、海外に文字や歴史のない人間がいるのではないかと、それはどのようなタイプの人なのかなどについての好奇

心が沸いてきたのです。しかも、肌の色や丈の違いなどを、正確に調べて、測ることによって、科学にめいた何かの学問が生まれてくるだろうというような考え方なのです。アンソロポロジーというのは、もともとはそういう意味の学問で、一種の「人間論」なので、「文化人類学」ではありません。むしろ、初期のアンソロポロジーとは、医学の部門の概念として生まれてきたと思います。

では、そのアンソロポロジーのミッションはどこにあるかという、結局、ヨーロッパの人たちに対して、それ以外の、つまり文化のない人たちの異質性を紹介するようなものです。決して誇るべきことではないと思います。

植民地での生活様式のあり方をヨーロッパ本国の人たちに見せるために、「世界博覧会」、つまり、「World Exhibition」という企画がありました。そのために、例えば、アフリカなどの植民地とか、アメリカ大陸などから原住民たちがわざわざ連れてこられて、人間がまるでモノと同様に展示される営みでした。彼らの生活と文化を本当に理解するためではなくて、「面白い、面白い」「あの連中を見てください、見てください」ということだったのではないかと思います。

やがて、アンソロポロジーとは、ある社会の「生活様式」全体を研究する「民族学」のような学問になって、植民地の人たちにも独特の文化があり、歴史もあるが、ただ、彼らには文字がないので自らの歴史などを私たちのように文字で以って表現し、記録できる手段はありません。

このように学者たちが次第に見解を変えて、それに従って異文化の実態を把握し、あるいは、見ることができるようになったわけです。アンソロポロジーには、このような変化が起ってきたことに、シュミットが唱えた歴史的民族学の弟子たちは、決して無関係ではなかったと思います。以上は、今ここで申し上げられる位のことです。

2番目の質問は、これに詳しく答えるのは、私にとってちょっと難しいです。事実だけ述べると、岡先生と石田先生は、2人とも南山大学に来たことは確かです。

ひとつは、『南山大学五十年史 写真集』の中に、人類学研究所の創立を祝う時の来客の記



クネヒト・ペトロ氏

念写真が載っています。その写真には、神言会の人も含めてたくさんの方々が写っていますが、一番下の列の右のほうに立っているのは岡正男先生です(南山大学50年史作成小委員会編 1999: 48)。

当時は、1949年の秋でした。まだ日本は今のようには豊かな国ではありませんでした。しかも、人類学を専門職にする人はまだ少ないし、しかも、彼らが就職できる大学などの施設も稀な時代でした。そこに、南山大学にはこのような施設ができたので、専門家を引き付けるような反応があったようです。そのような話を聞きました。

ただし、岡先生がそのときには既に当時の都立大学に勤めていたかどうか、確かめたことがないので、詳細が分かりません。しかし、彼には、その祝いに出席する特別な理由があったでしょう。なぜなら、彼はかつてウィーン大学でシュミットに教わったこともあれば、1935年来日したシュミットのために通訳と旅行案内を務めたからです。

それから、個人的なことなのですが、私が南山大学に来たのは1977年あたりです。その頃に岡先生が一度沼澤先生を訪ねてきました。沼澤先生は当時私と同じ家に住んでいたのので、岡先生と一緒に会いましょうと声を掛けて下さいました。それで、私は南山大学で、既に高齢者であった岡先生に会ったわけですが、彼が南山大学で教えたかどうか、残念ながら私は知りません。

石田先生の方は、南山大学でしばらくの間、東京から通いながら人類学を教えたということだけを聞いていますが、それ以上の詳しいことが分かりません。

*

【司会(宮脇)】 続きまして、再び山田先生への質問をふたつ紹介します。

南山大学の卒業生という方からの質問です。「シュミットのオーストリック語族を在学中に学びました。太平洋圏全域を包括するような大言語圏の学説について、現在はどうのような評価が与えられていますか」とのことです。そして、これはコメントかもしれませんが、「学術評価は別として、ロマン溢れる学習体験でした」とのことです。

もうひとつは、「ウィーン学派、ドイツ語圏の学問ではフロイトが巨峰ですが、シュミットの人類学とフロイト学派との関係はどう理解したらよろしいでしょうか」とのことです。このふたつについて、お願いいたします。

【山田】 ありがとうございます。後半の質問のほうが、あまり知らないということもあってお答えしやすいのですが、フロイトはシュミットとは犬猿の仲というか、シュミットはフロイトのことは大嫌いだと思います。ギングリッチさんからの孫引きみたいになりますが、シュミットがフロイトをウィーンから追い出したということが書かれていました。本当かどうか詳

しいことは分かりませんが、確かにシュミットの著作を読んでいますと、私が今日は自重気味に言った「プスュヒョロギジーレン」という心理学的な解釈や、そういう心理学の問題にすることをすごく嫌っている感じがします。

心のもちようは非常にシュミットの関心事ではあったのですが、彼にとっては、それを体系化し、ある文化圏の中に位置付けていくことのほうが重要で、内面の問題として取り扱うフロイトの姿勢とは正反対とまでは言いませんが、かなり違うものだっただろうと思います。

ひとつめの質問ですが、背景を言いますと、シュミットは「オーストリック語族」という仮説を立てました。これは2つの語族を組み合わせたというか、さらに上位の語族として考えたものです。ひとつは、オーストロネシア語族という、東南アジアの島嶼部からオセアニアに広がる語族です。もうひとつは、オーストロアジア語族という、東南アジアの大陸部に広く分散している語族です。このふたつが、過去の非常に古い時点では同一の祖先をもっていたのではないかとシュミットは考えて、それをオーストリック語族、アウストリッシュ(Austrisch)と名付けたわけです。20世紀のかなり早い時点での論文でそういうことを出しました。

私はあまり専門ではないのですが、言語学の分野でも、オーストリックを再評価する人たちがいると聞いていますし、アメリカの言語学者のグリーンバーグの弟子のメリット・ルーレンさんなんかは、そういうことを再評価しています。

それから、最近になっていろいろ面白いと思っているのは、ノストラティックという大語族です。ユーラシア大陸のいろいろな語族をひとまとまりにして、ものすごく古い時代には、共通の祖語があったのではないかとというノストラティックという仮説もありますが、知らない間に大辞典が出ていました。2010年代に3巻本だったか4巻本だったか、個人でやられたようなのですが、大きな語源辞典が出ていて、無料でダウンロードできるためダウンロードしましたが、まだ中身はきちんと見ていません。

非常に夢のある話で、古くさかのぼると、人類の言語がかつて、今まで考えられていた小さな無数の語族よりもさらに高いレベルで結び付いていたのではないかとという仮説については非常に面白いと、個人的には思っております。

*

【司会(宮脇)】 ありがとうございます。では、さらにふたつ紹介させていただきます。

ひとつめは、クネヒト先生だけでなく山田先生に対しても書かれているのですが、質問ではなくコメントを求めるとのことです。「植民地主義と人類学、布教と人類学の関係のあり方については、異文化理解における視座が自文化中心主義に陥らないことが重要なのではないのでしょうか。自文化中心主義、自文化優越主義、エスノセントリズムに陥らないことが重要なので

はないでしょうか」。

ふたつめは、クネヒト先生への質問です。「言語学のレンメルヒルト、民族学のアウフェンアンガー両先生の授業を受けたことがあります。これらの先生とクネヒト先生の関係や、両先生への評価があればお聞かせください」。

【クネヒト】 まず、レンメルヒルト(Anton Lämmerhirt)とアウフェンアンガー(Heinrich Aufenanger)の話ですが、私はレンメルヒルト先生に初めてスイスで会いました。当時、彼は私が教え始めたばかりの神言会経営の高等学校を訪れました。私が日本へ行きたい希望を打ち明けたら、彼は「馬鹿な考えだ」とか「日本へは行かないほうがいい」と言いました。

私には、彼の反応が攻撃的と感じ、なおかつ、彼に不愉快な印象を与えてしまいました。この反応の根拠となる理由はわかりませんが、彼は南山大学で言語学を教えていて、研究所の所長も務めた経験者でもある上、私と同じ神言会の会員でした。こうしたことで、彼の返事は謎めいたものでした。そのぐらいのことしか知りません。彼の研究については、わずかにだけ読んだので、詳しいことをほとんど知りません。自分が来日してからまず東京で暮らしていました。レンメルヒルトは南山大学を定年退職して、代わりに神学院で神学生の指導を手伝ったようです。スイスでのエピソードもあったので、付き合いを避けて、あまり交流はありませんでした。

アウフェンアンガー先生のほうは、もともとは学者ではなく、ニューギニアのミッシヨナリーでした。宣教地の人々の言語と文化に通じて、やがて専門研究をして、ウィーン大学で割と早くドクターを取ってから南山大学へ来ました。そして、1964年に南山大学の人類学科がニューギニアへ派遣した調査団の一員としてアウフェンアンガー先生も同行しました。彼は現地の事情に詳しく、住民との交流の経験もあったので、調査団にとって貴重な支援者でした。彼は調査地の住民と宣教師をよく知っていたと言ってもいいぐらいの方で、調査団の方々には現地の適切な話者を紹介し、調査地を案内して、調査を様々なところで支える役割をもっていたと、私は団員からも、本人からも聞いています。私は敢えてアウフェンアンガー先生の人と仕事を評価するならば、彼は理論家ではないが、熱心で、慎重な民族史学者だと言えます。彼には、人の話に傾ける耳があり、文化の品物を丁寧にみる目があった。後者を語っているのは、彼が南山大学人類学博物館に贈った貴重な資料です。

さて、異文化の見方またはその理解の場合に、自文化中心主義に陥らないことが重要なことではないかという質問者のご指摘はいうまでもなく適切です。しかし、例えば、日本から見たところだと、ニューギニア諸民族の文化とは事実上「異文化」、つまり異質な文化です。事実に「異質」を指摘するには一応問題ないはずでしょう。けれども、相手の文化は我々のそれよりレベルの低いか高いものかという評価になると、それは、我々の文化を科学的根拠のない

勝手な基準にする価値判断に過ぎません。このように文化と文化を区別しようとするのがもう意味がないと思います。でも、どのように我々がこの世界の人たちと、できるだけ偏見なく接触でき、交流をもてるかということが、基本的な問題であると私は思います。

人間としては、全てのヒト(人)は性質の面で互いに共通しています。但し、ある人たちが、どのように物事を考えているか、どのようにモノを作っているか、どのようなモノを食べているか、というそれぞれの特徴によって民族の相異が生じます。でも、この相異は必ずしも「人」の生まれつきの特徴による相異ではなく、人が長い間生きてきた環境の諸条件による相異ではないかと思います。やや、バスティアン(Adolf Bastian)くさくなったかもしれませんが、もしかするとこのような視点は、私たち人類の将来を考えてみると、大変重要なことかも知れません。

それから、ワルター・ハイシッヒ(Walther Heissig)というウィーン生まれのモンゴル文化の専門家が、1941年にウィーン大学で博士号を取り、中国へ行って、北京でエーデル師に会うわけです。エーデル師が編集をし始めたばかりの雑誌『Folklore Studies』に早い時から調査報告などを発表しました。

私は数回、北京を訪ねた際に、そこでニマという名の先生に会う機会がありました。もう退職された方ですが、ハイシッヒ先生の研究に大変詳しいのです。ハイシッヒ先生の弟子ではないようだが、ハイシッヒ先生に非常に親しまれた方です。ハイシッヒ先生の著作を殆ど全て所有していました。この方は、若い時にやはりハイシッヒ先生がエーデル師と協力した輔仁(Fu Jen)大学に来て、ハイシッヒ先生に教わって研究したということ話を話して下さいました。私個人として述べさせていただければ、ハイシッヒ先生はモンゴル人の学者や知識人の間でよく知られて、モンゴルの人たちとその文化をよく理解していた方として尊敬されています。

以上の方々についてこのぐらいにさせていただきたいのです。最後に、ナチズムと人類学の問題に触れてみたいのです。この問題の核心には「人種(Rasse)」と「民族(Volk, ethnic group)」という概念があると思います。大ざっぱに分類してみると、確かに、人類学にはふたつの大きな分野があります。ひとつは、解剖学に近くて医学的な人類学、つまり形質人類学です。今ひとつは、人間とその生活環境を研究するいわゆる文化人類学の諸部門です。両方ともお互いに関わりがあります。しかし、以上で出した概念のうち、「人種」の方が主として形質人類学的概念であるのに対して、「民族」はむしろ文化人類学で盛んに使われています。ふたつの世界大戦間に発表されたシュミットの研究には、RasseとVolkについてのものがあります。これら研究で、彼はドイツのそれをとくに取り上げているので、これらの研究はナチのイデオロギーをバックアップしているように使われていました。彼はこの利用に強く抗議したので、これらの研究は結局、当時禁止された本のリストに載せられました (Schmidt 1932, 1935. 後者につ

いてBrandewie 1990: 238-242を参考されたい)。ナチ人類学の人種研究を乗っ取ったりして、自分たちが最高に優れた人種、北欧系のアーリア人の発生地を科学的に証明できると期待していました。こうした努力の「大黒柱」は「先祖の遺伝(Ahnenerbe)」の調査によって、古代インドから移住して来たと言われたアーリア人の現地を探ろうとしました。アーリア人の純粋な末裔グループが、チベットの奥地に残存している伝承を辿ろうとして、ナチ党が党員学者の調査団を1938/1939年にチベットへ派遣しました(Schäfer 1943)。

しかし、人類学者の中でも、ナチのイデオロギーに賛同した人たちもいました。そうしなくても、ナチのイデオロギーを支援しているような内容の著書なら、ナチに使われたこともあります。シュミットはそのような扱いを厳しく批判したことがありますが、人種などに関する自らの発言には曖昧なものもあったので、それを誤解して、悪用する可能性がありました(Brandewie 1990: 242)。このような歴史を考えると、我々の学問には案外、何かのイデオロギーに弱く利用され得るような面があるのではないかと私は思います。

*

【司会(宮脇)】 ありがとうございます。これまでのやりとりの中で、後藤先生、伊藤先生からもし何かコメントや補足などがありましたら、お願いできるでしょうか。

【後藤】 単純な質問で、山田先生あたりに聞きたいのですが、アントロポロジーというのは、古くは哲学者のカントが言いましたよね。確かその本も岩波新書で翻訳されています。ただ、カントが言ったアントロポロジーというのは、イギリス人とドイツ人とフランス人の国民性を比較して、それを中国人はフランス人に近い、日本人はイギリス人に近い、韓国人はドイツ人に近いというような、国民性の議論だったのですが、カントが使ったアントロポロジーというのは、その後、ドイツのシュミットや、我々が今使うような意味でのエトノロジーやアンソロポロジーに受け継がれていったのでしょうか。それとも、全くそれとは関係ない学問になったのでしょうか。

【山田】 私は哲学について弱いですが、ただ、アントロポロジーというのは、ドイツ語で言うところと3つぐらいに分けられます。もともとは体質人類学的な人類学と、カントの言う人間学みたいな意味での、哲学的な人間学ですよ。それに加えて、今日お話したような社会文化的な人類学という言い方は、最近ちょっと英語圏の影響を受けてつくってきたところがあります。ただ、その源流は19世紀にもあったのではないかというお話をしました。

ですから、その辺はちょっと、概念の捉え方がドイツ語の場合はややこしいのではないかと思います。それぐらいしかお答えできません。

【後藤】 もう一つ、先ほどのご質問の、オーストリックの話で思い付いたのですが、私の話

でも最後のほうにちょっと言いましたが、最近また「ビッグデータ」といっていて、いろいろな、遺伝学や考古学、物質文化、民族学、そして神話学などのデータをコンピューターに入れて、その間の相関関係を調べてみると、予想も付かなかったような相関関係、ある地域とある地域が結び付いてくという結果が出てきました。

神話だけを見ると、例えばアフリカ南部のカラハリのサンやコイサン、いわゆるサハラ南部と、ネグリト族とアボリジニ、さらにグジンデがやったフエゴ島、南米の南部のほうに、実は世界に飛び飛びに共通性が現れてきて、一体これ

は何なのだろうという議論が出てきています。かつてシュミット、あるいは、おそらくブルーギーらが言ったいわゆる原始民族とされた集団に共通したものがあるのではないかという議論が出てきています。

それは最近、神話では世界神話学(World Mythology)というのがあって、私も紹介したことがあります、実は昔あって、一時否定された発想に近いですね。つまり地域を越えた、大風呂敷の議論は良くないということで、人類学でもどんどん研究の細分化が進んできたわけです。しかし最近になってコンピューターという新しい手段で、一人の個人が処理できないような大量のデータの間の相関をとにかく解析してみると予想もしなかった結果が出てくることもあると言われてしています。

しかしそれでも結果を解釈するのは、最終的にはやはり人類学者、神話学者なのです。このようなマクロの研究を再評価すると先ほど言ったオーストリックのような仮説の再検討というもの、ひょっとしてあり得るかもしれません。ノストラティック言語(ノストラ祖語)もそうですが、そういうもので人類史を語れるような新しい議論が出てくる可能性があります。望むらくは人類学研究所もそれに関わるような活動をしていければいいかなと思っています。夢といいますか、感想です。



後藤 明氏

*

【伊藤】 私個人としては、南山大学における人類学の研究や教育が、今後どのような展望の下に新しい魅力あるものに発展していくのだろうかということを期待しながら、とくに今ちょっと話題に出ましたが、民俗学、民俗文化、民俗社会というものと、欧米伝来のアンソロポロジーと言われるような研究展望との関係について、大学としてどのようにお考えなのかなということを前々から思っております。

南山大学は、やはりミッションの背景の下に成り立っている大学でありながら、実はこのグローバルな現代の世界の中でも、日本自体の文化的な基盤というのか、根深い、我々もなかなか自覚を迫られながらも難しい土着の文化・伝統というものをどのようにお考えなのだろうと。これはなかなか大きなテーマで、今日のシンポジウム自体のテーマではないのですが、今マイクを回された手前、外部の者としてこういうことを聞くべきかなと、今、あえて主任の後藤さんに伺いたいと思います。

要するに、南山大学の学問全体の展望の中で、人類学系の学問の中で、文化社会を対象とするような学問の中で、日本民俗学をどのように位置付けるのか。ワールドワイドないろいろなアンソロポロジーの展開はいろいろあっても、何でもかんでもできるわけではないので、やはり日本における、あるいは南山大学における人類学として、日本の土着の文化・伝統というものに対してどのようにお考えなのかなということを、今日のシンポジウムの本題とは無関係なのですが、こういう機会に、あえて聞いてみたいと思いました。

【後藤】 私の話の中でも出ましたが、民俗学の5大学研究所連合というのに加わりました。南山大学にはたくさん人材がいるのですが、フォークロア系の方は、当時、濱田先生という方がいらっしやったのですが、あまりたくさんはおられなくて、そういう部分を補うために、積極的にフォークロア系の大学、研究者と交流を図りたいということを試みたわけです。

それから、フォークロアではないので



伊藤 亜人氏



すが、「アジア人類学者ネットワーク」というものを国際化推進事業で進めた理由の一つが、私もそうですし、フィリピンの先生もインドネシアの先生もインドの先生も、何らかの形で欧米の教育の影響を何度か受けて、帰国されて、そして、自分たちの国の中で、それぞれ人類学を土着化しています。

例えば私はフィリピンの海のほうで調査をやっていた時期がありました。そのときフィリピンの研究者から学んだのはマリンロアやウォーターロアという概念です。マリンロアというのは、海に関する伝統的な知識という意味で、どうやって魚を取るか、どの季節に魚を取るかという、いわゆるプラクティカルな知識の基本ですが、例えば、海に関するいろいろな、言い伝えや「海坊主」「海幽霊」みたいなタブー、またこういうことをするとさらわれるなど、そういう超自然も含めた知識というか知恵なのです。

これはすごく勉強になりました。日本人の生態人類学というのは、どちらかというとプラクティカルな議論だけをしており、一方で伝説や神話や民話は、民俗学者がやるというように役割分担がなされています。ところがフィリピンの研究者たちは、それらをすべて一つの「ロア」という概念で捉えています。しかも、そういうものの社会における意味付け、例えば道徳や、してはいけないことを教えるという意味もあり、このような考え方は私はすごく勉強になりました。こ

これはフィリピンの人たちの、在地の民俗学みたいな知識であるわけです。それにすごく感銘を受けました。

それで、そういうものがインドネシアにもインドにもあるだろうと。そういうものを、取りあえずアジアの中で情報交換したらどうだろうと。さらに実際の背景には災害があり、人々は災害にどのように対応しようとしているのか、そういう在地の知恵についての情報交換をしようと言うことで、国際化推進事業をやってみたら面白いだろうということです。

それから、アジア人類学者ネットワークというのは、実は日本だけではないのですが、欧米で教育も受けている方が帰ってきて、もともとあった考え方とどう融合させて、いわゆるindigenous、つまり在地の人類学を、独自の人類学をつくり上げようとしているのかという情報をお互いに交換しようというものです。日本は日本で、やはり日本のフォークロアの議論なんかも視野に入れつつですね。ですから、国際化推進事業の国内のシンポジウムでは、いわゆるフォークロア系の人でも実際に呼んで、「災害」というコンテキストではありますが、議論しています。

そういう形で、もともと人類学は欧米から輸入した学問ですが、それをできるだけ在地というか、日本独自のものにしていく努力は、研究所でやってきたつもりです。ただ、それはアジアという枠組みです。ですので、もちろん広いアジアが一枚岩だと言っているわけでは全然ないのですが、近隣の国の人たちとそういう交流を図るような場に人類学研究所がなっていけばいいのかなと思っています。

人類研の仕事を引き受けたときに、例えばモデルになるのは、もちろん国立民族学博物館や東京外国語大学のアジア・アフリカ言語文化研究所などがありますが、そんなに規模は大きくないので、あまり大きなことを考えると良くないので、もうちょっとターゲットを絞った形で活動しようと考えました。しかし、やはり人類学は国際的な視野は捨てられないし、しかし日本の、あるいはアジアの、いわゆる在地の知恵みたいなものも生かしつつ、問題点をはっきりさせるような、そういう研究所にしたいと考えていました。そのために、いわゆるアジア人類学者ネットワークというものを始めてみたのです。あまりお答えになっていないかもしれません。

【司会(宮脇)】 ありがとうございます。

では、これで総合討論を終えさせていただきたいと思います。先生方、ありがとうございます。

参考文献

Schäfer, Ernst

1943 *Geheimnis Tibet. Bericht der deutschen Tibet-Expedition Ernst Schäfer*. München. F. Bruckmann.

Brandewie, Ernest

1990 *When Giants Walked the Earth: The Life and Times of Wilhelm Schmidt, SVD*. (Studia Instituti Anthropos, v. 44), Fribourg, Switzerland: University Press.

南山大学50年史作成小委員会(編)

1999 『南山大学五十年史 写真集』南山大学。

Schmidt, Wilhelm

1932 *Die Stellung der Religion zu Rasse und Volk*. Augsburg. Haas & Grabherr.

閉会の挨拶



吉田 竹也

(南山大学・副学長／人類学研究所・第二種研究所員)

吉田と申します。どうぞよろしく申し上げます。業務の関係で最初から出られず、失礼いたしました。

総合討論の場でクネヒト先生のお話を久しぶりに聞かせていただきました。私は実は南山大学出身でして、学生のころにクネヒト先生の授業を取っていました。パンフレットの中でクネヒト先生が書かれていらっしゃる、宗教を研究する立場というか……私は学生のときにクネヒト先生の授業を聞いていて、実は今初めて、クネヒト先生のパースペクティブと授業の内容が繋がった気がしています。

先ほどの総合討論の中でも、クネヒト先生は、文化相対主義と言うけれども、自文化中心なの人間なのではないかという趣旨のことをおっしゃっていたと私は受け取っています。私も実はそういう考え方です。文化相対主義は確かに理想的なのですが、みんな、やはり自文化中心主義なのだろうと思っています。

例えば、私はわりといろいろな本を読むのですが、アメリカのプラグマティストのリチャード・ローティが確か、「私は自文化中心主義の立場だ」というようなことを明言しています。たぶんそれも、先ほどのクネヒト先生のコメントに通じるものがあるのかなと思っていました。

本日は、人類学研究所のこれまでの歩みを振り返りつつ、未来に向けて、研究所が、そして人類学がどういう方向に行くべきなのかという、非常に大きなテーマであったかと思います。

私自身も人類学をやっていますが、非常に拡散しているのが現状だろうと思っております。そもそも人類学というのは人間を相手にするわけですが、これから世界の人口動態は非常に、地域によって拡大していくところと、縮小していくところと、いろいろまたいびつなことになっていくのかもしれない。そういう中で人類学というのは、本当に、この後、何世紀ももつのかというようなことも含めて、今後いろいろ検討していくことがあるように思っています。

副学長の立場というより人類学をやっている人間からのコメントになってきていることを今、反省しています。

本日、会場にいらっしゃった方々は、非常に細かいところから非常に大きな話まで、いろいろな論点を提示されていたと私は受け取っています。人類学研究所は、南山大学に3つある研究所の中で最初にできた研究所ですし、今後ますます発展していくことを、私も関わるべき一人としても願っております。本日のシンポジウムは成功裏に終わったかと思っております。本日はどうもありがとうございました。



懇親会の様子

講演者・コメンテーター紹介

(収録順/シンポジウム開催時点)

- 鳥巢 義文 (南山大学・学長)
- 渡部 森哉 (南山大学・教授/人類学研究所・所長)
- 山田 仁史 (東北大学・准教授)
- クネヒト・ペトロ (南山大学・元教授/人類学研究所・元所長)
- 後藤 明 (南山大学・教授/人類学研究所・第二種研究所員)
- 伊藤 亜人 (東京大学・名誉教授)
- 吉田 竹也 (南山大学・副学長/人類学研究所・第二種研究所員)

本講演録の内容は、南山大学人類学研究所ウェブ・サイトにカラーで公開されています。ウェブ・サイトからはPDFでダウンロードしていただけます。

人類学研究所:<http://rci.nanzan-u.ac.jp/jinruiken/>

じんるいけんBooklet vol.7

南山大学人類学研究所
設立70周年 記念シンポジウム講演録講演録

人類研の歩みと 人類学の未来

発行日 2020年8月31日
編者 南山大学人類学研究所
編集責任者 宮脇千絵
編集補助 加藤英明
発行者 南山大学人類学研究所
〒466-8673 名古屋市昭和区山里町18
電話 (052) 832-3111 (代表)
代表者 渡部森哉
E-mail ai-nu@ic.nanzan-u.ac.jp
Website <http://www.ci.nanzan-u.ac.jp/JINRUIKEN/>
デザイン 株式会社サウザンドデザイン
印刷・製本 株式会社ウエルオン
装丁 加藤英明
ISSN 2434-9658

Lecturer

山田 仁史(東北大学・准教授)

講演 1 ドイツ語圏人類学におけるP・W・シュミット

クネヒト・ペトロ(南山大学・元教授／人類学研究所・元所長)

講演 2 Missionary and Anthropologist, a Contradiction?

後藤 明(南山大学・教授／人類学研究所・第二種研究所員)

講演 3 人類研の目指したもの、そして目指すべきもの

Commentator

伊藤 亜人(東京大学・名誉教授)

